



434

特255

944

日本醫學叢書

第四輯

故藤田謙造先生著

得益錄

日本醫學研究會發行

始



特255
944

得益錄上篇

藤田謙造述

咯血に桃仁承氣湯を與ふる事

一 女年十八九六月の末胸中微痛稍快懐するの意あつて終に一日何か咽喉に迫る者あるを覺えて二三聲咳すると忽ち鮮血二三勺を吐出し如此者四五次治せずして自然に鎮まりしが八月に至りて又如此者一次前に比するに其量多くして殆んど一合に及び繼で胸中不利を覺へしかば驚ひて其翌日栗園先生の宅に至りて診治を請ふ。余先づ之を診するに身體は肥實したる方にて血澤も厚く少しも虚候なく二便も滞りなく經水も順調にして何も他の異狀なけれども食氣少く減じて步履に短氣すと云ふ。舌上少く胎あり脈稍緊數を帯び腹部は兩脇下拘攣して心下稍痞鞭し腹都て微滿して力あり。從來の仕來りにては大柴胡加甘草石膏と行く處なれども先生家にて此の如き治法を用ひらるゝや否やを知らざるを以て其血凝を治せらるゝ諸方の中にて麥門冬湯加膠地連を付けたれば先生之を診して其方中らずと云て更に桃仁承氣湯を處せられたり。

先生咯血を治せらるゝの法方は大抵黃連解毒湯竹葉石膏湯加生地黃麥門冬湯地膠連黃連阿膠湯扶脾生脈散等の方を



以て其症と寒熱虛實とに隨て撰用せらる。而して其純實の症にして瘀血胸中に聚て致す處となす者は桃仁承氣湯を單用し或は右の諸方に暫く兼用して其大勢を下に向けて疎滌するの手段を用ひらるゝ事あり。黛山師の法は一種の風ありて預しめ血症の治方は斯様水腫の藥は斯様と定め置く事なく其証に隨て自由に諸方を用ゆる事故常の定方と云事なく或は麥門冬湯加運石溫清飲或は加石膏紅花或は三黃加石或は加味犀角地黃湯或は清肺湯其變に至ては抑肝散にて肝火を鎮め半夏瀉心湯にて飲火を伏し以て肺部を煽動するの根本を制して血を治せずして自ら收まるを得せしむるの手段なども亦面白き事にて屢奇效もあり、此女子の症などには腹をすかし鬱火を退けて血を鎮むるの手段にて大柴胡加石甘を與ふる處なり、されども余が郷里に在ては元來咯血咳血の症甚だ少なく依て此病を療する事多からねば自然經驗も多數に及ばず東京の如きは肺血の証夥しき事實に驚くべきに至り前の諸方は先生多年其間に經驗して定められたる所にして桃仁承氣湯を用ゆるに至ては殊に捷徑と謂つべし。吐血に桃核承氣湯を用る事は醫史櫻寧生の傳に出づ宜熱讀して其説を翫味すべし。

又按ずるに咯血數度に及んで尙ほ鎮止の見込を得ず或は初發と云へども失血多くして其虛脱を恐るゝ者は代諸末或は花蘘石末を與へて暫時止血の手段となす。或は是れにて再發せずして治するもあり至て便利なる法にして栗園先生の日用とせらるゝ處なり。是等の手段は洋家の硫酸の類の收斂劑をば嬰ふて攻め落す様なる働きあり。

四逆散に吳茱萸良姜を加へて反胃の前兆を治する事

四逆散の腹候にして或は嘈雜呑酸或は心下痛し或は痛まずして只妨滿し而して慍々吐せんと欲し或は手を以て咽を探り強て吐を求め吐すれば暫時爽なるを覺へ以て常習を成さんとし反胃の前兆を見られて未だ虚候深からざる者先生四逆散吳茱萸に起腹丸を兼服せしめらるゝに妙に效驗あり。

此加味は一の奇法なり黛山師は常に蠅牡茴香劉奇奴或は干姜茴香劉奇奴或は干姜牡蠣劉奇奴などと加味して其上に痛みの左右或は癢急の左右輕重に従て或は良姜或は吳茱萸を加ふる事故吳良と併伍する事はなきなり。余先生の門に入りし初めに吳伏良姜の加法あるを見て不審に思ひ或は窃かに其妄を疑ひしが漸くに其功效を見るに全く右の處に行くなり。四逆散吳伏は常用の法にして反胃には關係せざる方なるに夫れに良姜一味を加へ右の症に利くは一味の去加方に行く處を異にするの運用實に面白き働きなり。窃かに按ずるに此加味の良姜は即ち安中散方中良姜と同意なる可し、和田東郭が吳茱萸良姜を左右に分て使ふは七味良根湯の主治に拘泥せし者にて古方の主意には戻る也。

楊氏の丁香茯苓湯にて反胃を治する事

一人食後必ず心下痛し暫時にして水食を吐し已に反胃の狀をなす者余之を診して安中散を付けしに先生更に診して楊氏の丁香茯苓湯を處し兼用に起癢丸を與へられたり、丁香茯苓湯の主治は方函及び口訣に見へたり。

丁香茯苓湯は余從來其方名をだに知らざりし處なりしが反胃の未だ極虚に至らざる者に必ず効あり、郷里には此症甚だ希なる故自然療方も狭く嘗て此症を療して百方苦慮僅かに治するを得たれ共其當るや否やを了せざりしが今に至

て之を思へば左程に苦心も入らざりし事なるに識の足らぬは不自由なる者なり。是れ余先生の門に入て殊に益を得たるの一つなり又方函口訣に安中散は痛を主として吐水には効なき事を説かれたり

四

起廢丸を水飲固着の症に兼用する事

水飲固着の症にして便秘する者或は秘せずとも平便以上の者には必ず本方に起廢丸を兼用せらる。本方は諸の四逆散加味の方或は堅中湯寛中湯茯苓飲良枳湯解急蜀椒湯茶桂甘薑湯丁香茯苓湯の類なり丁香茯苓湯に兼用する事は殆んど定法の如くになれり。

按ずるに水飲固着の症多くは便秘する者にて反胃なぞに至ては水飲固着の最なる者なり。己に虚脱極まりて殊に下利する者なぞと至て治不治死生も覺束なき程の者は論のなき事なれ共、未だ其場合に及ばぬ者は多くは便秘したがる者なり。水飲の症故便秘したりとも熱實にあらず胃中寒を畜ふるは知れたる事なれ共下を得ざれば腸中の氣通ぜずして水飲も下降する能はず此所に只調胃丸や瀉心丸の類にては便をば得れども胃中の氣を鼓舞して水飲掃がすの能はなき故効立たずそこで此起廢丸を用ゆると誠に工合よく妙に應効あり。古人も此類の藥方ありては枯血を動かす説は聞けども先生の如く飲症に日用して効驗多きは今日始めて見る所なり。按ずるに漆の性は固より溫物にして其功は揮發の力あり附子に似たる所ありて彼に比すれば此の場合に用ひては今一等手の届きたる細工ありと知るべし。生漆を破血に用る事は世の普く知る處なれども沉痾痼疾に活用して非常の効を奏する事は松原圭介に權輿して山東臨洋に深

造す敬服すべし。

忍冬解毒湯の事

一女年十九壯健なり一日左額下に蚊螫の跡あるを爪にて搔はがすと忽ち汗出て瘡となりて急に蔓延し四五日にして殆んど面の三分の一を覆ふに至れり余先づ之を診するに一面に紫赤色になりて其間に稠密に粒々糜爛ありて粘汗淋漓たり少き部は瘡をなして晒し膠の色如く透明にして惡毒強きの微なり地腫もありて其部の皮肉少しく堅く凝りてあり且つ微惡寒發熱等もあり日數淺きに蔓延此の如きに至りて毒勢も甚だ盛なり從來の仕來りにては先づ葛根湯加荊防石に再造散加天石と行く處なれ共勿誤藥室方函中にて矢張清涼解毒の方なりとし清上防風湯加石膏を付けたれば先生更に診して忍冬解毒湯を處し兼るに五味鼠鬚丸を與へられたり。

忍冬解毒湯は方函口訣に本と三浦貞安が瘡瘡に用ひし方なれども今用ひて凡そ腫瘡膿水淋漓血分に關する者を治して効ありと説かれたり、解毒の中に發表解凝を兼て面白き方組なり、又五味鼠鬚丸は方函に治微毒痲瘋或胎毒耳聾とありされ共此様に毒勢の急にして盛なるときは發表清涼の劑にて一と先づ其毒を疏し其勢を挫きて後解毒にかゝる手に段て全効を收むる事もあるなり。

小半夏加茯苓合甘連石にて疫瀉病を治する事付五苓散散加石膏

五

治瘟篇に小半夏加茯苓合甘連石の治験を多く載せられたり。治瘟篇は即ち疫瀉病の事を説きたる書にして栗園翁の著述なり。余其門に在りしとき一男年二十四五極めて壯健なり一日午後に至り俄かに腹痛吐瀉して腹痛は暫時にして緩みたれ共吐瀉止まず大渴して水を飲む事極りなく終に四肢厥冷脈絶し指皮皺紋眼窠陷胸中煩悶心神恍惚等の症を俱ふ。翌朝に至りて吐瀉は略止みたれども諸症は依然として閉塞甚し岩本氏之を診し小半夏加茯苓合甘連石を致ふ。日暮に及ぶ頃ひに余之を診するに未だ開達の徴を現はさざりしが又其翌朝に至つては諸症大に復し煩悶鎖まり體温周ねく精神爽かにして殆んど全癒の域に入れり。

暴瀉病は安政年間に天下一般流行せしとき余が郷にも餘程流行して其災厄に罹りし者甚多し余が家の親しき者も數人或は病み或は死したれ共其節は余尙ほ幼年の時にて殊に醫家にもあらぬ故何の心に留めたる事もなく只恐ろしき病なりと見聞せし而已なりしが明治十二年の夏流行の節余が郷にも又其病に罹りて死亡する者多し。依て余始めて此病の療治を試みたり。衆醫の治療風を見るに洋家にては専ら阿片甘肅吐根龍腦麝香の類を用ひ漢家にては參附の劑を投ずる者多し。又五苓散半夏瀉心湯の類を專一に用ゆる者もあれ共何分にも救ふ事能はずして極輕症の外は必ず十の八九死亡する事を免かれず。余も亦二十七八人を療せしが死亡の者十四人に及べり其初め考ふるに此病は稀有の奇症故治法も亦た一奇策あらんと種々に工風を凝らせ共未だ何の得る處もあらず、只此症は濕疫論て云ふ處の脈厥體に類するならんと疑を起したり其門治を乞ふ者ありしに右の疑を懐きし事故温補や揮發の藥は不可ならんと思ふて參附龍腦用ひず又大承氣湯とも見えず五苓散類の力の及ぶべき共見えず依て胸滿煩悶皮表の閉塞を目的にして小柴胡加犀角

にして犀角を一日に二錢も與えし病者は三人程全治したり。此三人を療治中に追々患者重なりて餘程の劇症に出合ひ又虚弱なる老人もあり又已に五六日を経て衰弱極りたる後にて治を乞ひしもありて小柴胡加犀角も及ばず理中湯も効なくして引續きに四五人殺したりければ忽ちに迷ひを生じて先きの小柴胡加犀角にて生路に懸きたるは畢竟偶然にてありしならんと疑を生じ更に厥冷脈絶轉筋等の甚きは四逆湯を用ひて殺したるもあり、大承氣湯を與へて誤りたるもあり後に至りては間々奇効を得たりしもあり、脱利になりて尙胸悶舌胎依然たる者に工風して半夏瀉心湯に玫瑰花を多量に加へて與へしは程克く利も收まり胸悶等も鎮まりて三人を救ひたり。又初起の稍緩なる者は急に葛根加黃芩湯にて發汗せしめて必ず治し病一等輕くして吐多き者は五苓散加赤石脂を與へて癒たる者合せて七八人なり、其中ちに流行も止みて其他の經驗もなく前の小柴胡加犀角がよろしきや又石膏劑も用ひて見度く白虎湯を與へたるもありしか共是れは病勢至て劇甚にして未だ一貼を服し盡さずして已に絶せし程の事故石膏の經驗をも得る事能はずして遺憾に思ひしが治瘟篇を讀て小半夏加茯苓合甘連石の治験多きを見て胸宇廓如として初めて夜の明けたるが如く且つ今日一男子の治験を目撃して愈其方の妙なるを曉れり。昨年より之を知りたらば今四五人は決して救ふべき者なりしを遺憾絶へがたき事なり。又証によりては五苓散加石膏に宜しき者ありと先門人の話しを聞けり小兒には大抵此の五苓散加石膏を用ひらるゝ由。

世醫此症の吐瀉病にして顔肉の削脱は至て甚しく周身氷冷脈絶肢末皺縮等の症他病に比なきを見て虚脱の極となして恐るれ共余が經驗する處にては幸にして治癒する者を見るに肌膚温まり脉出て、胸悶減すると未だおも湯の一滴も

八
米飯の一粒をも食せざるにそろそろと肉脱も復し皺縮も収まるを以て察すれば決して虚脱の爲めに然るには非ずして閉塞に困て然る事を知るべし且つ煩悶劇しければ右の諸症も劇しく假令老人虚家などの衰弱に陥りて死するも胸悶少き者は右の諸症も微なり又舌胎も黄黒に至り冷湯引飲等の然症もあり又病勢至劇の者は只一二回にして吐瀉は止んで右の諸症は反て甚しく死するも速なる等を彼是参考すれば益々其閉塞に因る處にして衰弱の爲めに非ざるを徴すべし。故に温補揮發の劑の効なくして害あり石膏の害なくして効あるは理はりなり。余治瘧瘧を讀て益々其管ら脉厥體厥に類せる症なりとの疑を起せしは稍見る處ありしを自ら信するなり。

瘧 疫 論

桃仁湯を血淋に用ゆる事

一婦人年四十有餘七月頃長途を進行せし内に血淋の症に罹り小便頻數にして不利、裏急尿道疼痛血を滴瀝し困苦云ふばかりなし。同月の末に東京に入り醫治を経て漸くに快よき方なれども血瀝尿道疼小便頻數なる事尙ほ全癒せざる内九月初旬に至りて一日俄に小腹撃痛を發し劇しきときは心下脇下に連なり肩背も亦強急し小腹は手も近づけ難きに至り起臥轉側も容易にはなり難き程にて此の腹痛を發してより三日目に至りて來つて栗園先生の診治を請ふ。余先づ之を診するに臍の左右より小腹に至るまで太き拘攣ありて之を按せば痛み其人は元來大振りなる體格にして腹も廣く且つ厚く又此症に罹りて以來も經水は少しも常に變る事なし。畢竟長途に疝を起し夫よりして終に此の如き症を醸したる者にて經水に變りはなけれども何れ瘀血の凝滯も有るに相違なく小腹の拘攣の模様も一と通りの急急とは異なる處ありては小腹に滿氣も有り破血の劑を與へて見度く思へ共大便は十日以前より水瀉にて晝夜に三四行も下痢すと云故桃核承氣湯や大黃牡丹皮湯の大黃芒硝と行へき處にあらず、且つどこやら急に寒冷の藥を投じては却て逆すべき模様も見ゆる故只輕き温散中に緩攣利水を組て疝を緩むる處の當歸四逆加吳茱萸生薑湯に兼て蒲黃滑石散を付けたれども先生更に診して温疫論の桃仁湯を與へられたれば之を服する事二三日にして諸症大に緩解し幾くもなくして郷里に

發足せり。

此の桃仁湯は右の場合に用ひては實に適當なる者にして諺に願つたり吐つたりと云が如き方にしてやらすのがさずと云ふべき組みかたあり按ずるに當歸芍藥あたりまへに擘急を緩むる藥を主にして併するに桃仁牡丹皮を以て瘀血の凝滯を通し兼ぬるに滑石阿膠を以て膀胱及び尿道を和らげ通する手段なり右の場合にして藥の強きも却て害あり緩るきは力及ばずと云處によくも此の如き便利にして且つ捷徑なる方はある者やと驚く斗りなり方は約を貴んで而して博きも亦た益ある事此の如き者あり。

釣藤羚羊と組みたる諸方の事

栗園翁の諸癩症を治せらるゝの方多き中にも釣藤羚羊と組みたる者數方ありて柴胡龍骨牡蠣湯去鉛丹加芍藥甘草釣藤羚羊四逆散加黃芩羚羊鈎藤抑肝散芍藥羚羊舒筋溫胆湯大羊羚羊飲治肝虛門然一方等を以て其虛實寒熱と其腹候と病の所在と病狀の異同に隨て自由に應用せらるゝは實に拔けめのなき働きと云ふ可し。

按ずるに同じ癩症にても何れ病根に異なる處ありて隨て病狀も夫れ／＼の違ひあり夫故柴龍牡蠣加減は専ら癩癩或は癩癩に疑似する者に用ゆ。此は一段上部に壓迫する勢ひ強く胸中より上つて頭腦を犯す者なり。故に人事不省を主とす。是れ其龍骨牡蠣大黃と組んで鎮墜下降するを専らとする所以なり。又四逆散加味は肝鬱より起る者にして其人必ず氣字鬱塞形體樂まず其鬱結の甚きよりして癩癩もするなり。抑肝散加味は肝氣の亢ぶる者にて其人必ず性

急怒癲等あり其性癲の増長よりして癩癩するに行くなり夫故腹候も腹皮に就て緊しく拘急しいかにも表面に見はれて逆散の少しく沈んで結ばるゝ者とは違へり。但し小兒には強て此腹候に拘はらざる事あり。比較して言へば四逆散と抑肝散とは緩急の異ありて抑肝散は病勢急にして鎮まり易く四逆散は病勢緩にして治し難し。譬へば發狂に靜にして悲哀する症は治し難く騒がしく暴亂する者は却て鎮まり易きが如し大羚羊角飲は大柴胡湯の腹形なれども實は痰物あるにもあらず下を以て治すべき爲めには非ざる故大黃を去てあり。但し時宜により大黃を加ふる事もあり畢竟四逆散の今一段結實も強く就ては心下の飲も一等多く胃中に伏火を蓄へたる所を目的にするなり。且つ四逆散加味は熱なけれ共大羚羊角になりては身に熱あるもあるなり。舒筋溫胆湯は四逆散に比すれば虚に屬する方にて寒飲胸脇に結し之が爲めに益々肝氣を塞がれて其人驚悸等の症をも兼ぬる故竹茹半夏茯苓吳茱萸木瓜と組んで胸胃の間の飲を溫散下降し依て溫胆とは名づけたるなり。且つ筋急を主とする故當歸を伍したる處抑肝散の當歸と同意なり。治肝虚内熱の一方に至りては又一段病勢に違ひありて上の諸方に比すれば虚候も一等深き者なり。畢竟は肝氣の虚よりして感觸も顯敏になり夫より癩症をも發し且つ餘程病に古るび付きて頭腦に根をおろしたる姿ありて専らに胸腹を治したる而已にては手の届きかぬる處ある故防爪天麻酸棗仁と組み虚候多き故人參白朮を伍したり。是れ右の六方の別の大略なり。其主治目的は方函及び口訣に詳なり宜しく就て見るべし故に此に贅せず。或は問て曰く凡て直視上竄口噤搐搦等をなして病にをこりさしてある者を癩症と云へ共其癩症の中にも病因に違ひありて或は癩癩あり或は肝鬱より起り或は尤ぶるより起る等の異なるあり、夫れに必や羚羊鈎藤はなくて吐はぬ

者の如くに右の諸方に必ず相伍用する者は何ぞや。余答て曰く夫れは羚羊釣藤の特効を取り用ひたる者にて羚羊は筋を緩むるの薬にて勁急播搦を治し釣藤は肝氣の凝りを破る薬なり。故に諸痢症の汗吐下を以て治し或は純補にあらずれば救ふ可からざる者の外は大抵此二薬を伍する事なり。譬ければ米にても豆にても穀も海苔も干てんも其品は異なれ共乾して固まりたる者をば一の湯水にたにひたせば必ず再び柔かになると同じ道理なり。是れ其病因に少しづゝの違ひはあれども肝氣の凝るより筋の動搖を起すは同じ事故必ず釣藤羚羊を伍して之を緩むるなり。但し病因と形勢とに違ひある故必ず其方は各異にして其宜しきに應ずるなり。是れ則ち應用の妙にあらずや。按ずるに諸の痢症寒熱虚實の別ありと雖も他の實邪の爲めに誘動せられて發する者と小兒急驚風を除くの外は大抵虚に屬するを多しとなす。若し或は外邪より誘はれ或は停食の候等有て發する者は先汗下の劑を用ひて邪實を解し而して後に痢症尙ほ鎮まらざる者は始めて痢症の薬を與ふべし。邪實のあるに釣藤羚羊を何程用ひたり共効能は立たざる者なり。但し時宜によりては邪と痢症と兼ね治する事もあり。童兒などは痢斗りを治して痢症鎮まると邪も隨て解する事もあり。見立に功者の入る處なり。されども痢症の人得ては實症の者少なく釣藤羚羊を伍したる劑の効ある者多し。夫故本と大柴胡湯の大黃を去りて加味したる大羚羊角飲すら純粹の痢症には他方に比すれば用ゆる事甚だ稀なり。柴龍蠟の大黃は畢竟上逆劇しき症故牡蠣龍骨に伍して鎮墜下降の功を佐くる迄にて敢て瘀實を下すの意にはあらずらざるなり。

釣藤散の事

上逆の症肝氣の鬱塞より氣水を醸して起る者に先生本事方の釣藤散を用ひらるゝに奇効あり。此方本は治肝厥頭痛とあり方函口譯に俗に所謂痢症の人氣逆甚しく頭痛眩暈し或は肩背強急眼目赤く心氣鬱塞者を治す此症に龜井南溪は瀝胆湯加石膏を用ゆれ共此方を優れりとすと説かれたり。

按ずるに此方釣藤石膏と組んで肝氣の結を破り上逆の勢を伏制し之に菊花防風を伍して頭部を疎通する處最も面白し。夫れに茯苓橘皮半夏麥門冬を佐として胸胃の間をすかし滋潤且つ降下する故上の藥の功も立ちて意を用る事周密なる一良方と謂ふべし。余が郷にも此症多く老人及び血液枯燥したる人など逆上すると云て常に頭痛目眩眼中赤く或は痒く或はくしゃくとして爽ならず肩背強はり上重く下軽く歩踏定まらざる等の症ありて或は僅かの事にも腹立て又は物毎を苦勞にし神氣鬱塞等の症ある者或は柴胡姜桂湯或は東郭翁の理氣湯或は溫清飲を與ふるに効少なく依て釣藤に石膏を伍したる者を工風し抑肝散加黃連石膏方を用ゆるに間々効あるに似たれ共此等の病人氣逆を主とする故得ては腹部も軟弱なる方にて肝氣の變を腹筋に現はし緊しく脇下に擊急する者とは違ふ故當せずして全効を收むる事能はざるも理なり。種々に苦求すれ共良方を得ずして空く日を送りしが先生の門に入るに及んで始めて此の釣藤散を得たり。余も嘗て本事方を讀みたる事あれども書中空論に似たる事多き故心中にうるさく思ひ紳々に看過したれば此の如き良方あるをば心付かずしてありしが今先生の用ひらるゝを見て彼書に此標なる良方が

在りしやと疑ふ斗りなり。實に良師には就くべき者にこそ。許氏本事方の醫按と冠氏本草行義序列の醫按は千古に卓絶して醫家の龜鑑なるに勿々に看過せられたるは口惜しき事也。

一四

外臺柴胡鼈甲湯を喘息に用ゆる事

喘息の病人四逆散の腹候にして拘結強く屢發して止まざる者に先生外臺の柴胡鼈甲湯を與え發して劇しきときは緩苦の爲めに麻黃甘草湯を兼服せしめらるゝに奇効ありて多年の宿疾幾ならずして脱然と平癒する者あり。方函口訣に此は集驗一方とありて方名なし。洛醫録田碩庵此名を冒して喘息の痲痺より來る者に屢効を得たりと載せられたり。

按ずるに喘息の症多くは酒客及び膏粱を多喫するの家時氣の交代に逢て發作する者多し。腸胃間に痰濁を醸し隨て血液も純良ならずして混粘する處に外氣の胃觸を得て起ると思はる。一旦發するに辭になりて全治しかたき者多し。余は從來初起に發表劑を與へて汗を取らしめ次に大柴胡湯を用て之を下し跡は前方去將或は四逆散加味等にて治療せし症は取も直さず先生の柴胡鼈甲湯を用ひらるゝ處の症なり四逆散に鼈甲を組みたる處に味ひありて面白き手段なり。痲痺より來る者と云に心を付く可し。故に是非とも一下取らねばならぬ者には先づ大柴胡湯類の方を與えて後に此方を與ふ可し又一段劇症にして喘息發すると呼吸窒塞せんと欲し少しも横臥する能はず肩項強急至て甚しく血液粘滯の候ある者は其人の強弱に依りて尺澤を刺すか或は肩に吸瓢を施して多少の瀉血を行ふときは手際速効ある者にてれ施術終りて道具を收むる比にははやそろそろと睡を催す程に緩む者なり但し緩症には瀉血の効

少なく劇しき症に速効あり。此の如き劇症になりては腹氣も上に逆して悉く胸中に壓迫し藥も緩藥にては間に合はぬ故葛根黃芩黃連湯か三黃瀉心湯か或は麻黃杏仁甘草石膏湯か或は大柴胡湯其他對症の藥に硝石を加へて與ふるを常となしたり。是れにて一時は必ず緩るみ又痲痺強ければ藥よからねば病勢を挫く事も出來ぬ故右の治法も時に取ては必用なれ共得ては時候の交代に遭ひ酒膚を少しく過度しても再發する者多し。右の治法にて大勢挫けて後其跡を病根を絶ち再發を防ぎて全効を收むるには彼の痲痺の目的ある者には必す柴胡鼈甲湯を長服せしむるに如くはなかる可し。又病勢極劇ならざる者には始めより直ぐに此方を與ふ可し刺絡及角法は一旦の速効ある事余も經驗したれ共往々衰弱の弊あり宜其症を詳にして施すべし。

喘哮ノ症ニ麻黃湯ト厚朴麻黃湯ト神移湯ノ口訣アリ三湯ノ場合ヲ能ク合點スベキ事

小半夏加茯苓湯に新加橘皮の説

先生小半夏加茯苓湯を用ひらるゝには必ず新たに橘皮を少しく加えて與ふるを常とせらる。吞む人受け心よくして面白き工夫なり。

或問て曰く小半夏加茯苓湯は半夏生姜嘔吐を治する上に茯苓を加えて水を鎮め尿を導て下降するの手段にて仲景製方の妙盡せりと云ふ可し。されども時宜に應じて加減するは止む事を得ざるなれ共今何の故ともなく橘皮を加ふるを常とするは其理なきに似たり抑も亦説ありや余答て曰く總じて藥方は食品を料理するが如き意ありて料理に色

一五

々の取合せあれば薬方にも夫々の組み方あり、譬へば人若し魚のさし身を食はんと欲すれば必ずおろし大根を加ふるはさし身のあつさりとしたる處におろし大根にて益々あつさを佐けて程克く口中に適するなり。半夏生姜は嘔吐を治する淡薄の藥なるに重ねて茯苓の淡薄を加えて益々半夏生姜の降氣滲敗の功を逞ふせしむ。茯苓にて嘔を鎮めんとするに非ず頼む處の本功は半夏生姜にあれども其本功を佐くるか爲めに加味するの道理はその嗜む處はさし身にあれども其本味を佐くるが爲めにおろし大根を加ふるが如くおろし大根を嗜んでさし身を食ふにはあらず又右のおろし大根を加えたる上は最早夫れにて不足はなき譯なれども今一といきと云ふ處にて更に少しく山葵を加えて食ふと同じ道理にて茯苓を加えたる上は何も細工だてをするには及ばねどもそこを今一といき橘皮のびんとしたる處を加えて用る時は藥水胃中に入りて運りよろしく半夏生姜も茯苓も十分に能を盡す事を得るは恰もさし身に山葵を加ふれば一等味ひをよくして且つ胸中もさつぱり食ひ心よきと同じ道理なり。此工合ある故後世功者の醫者は假令仲景の方にてても時宜に加減差引して其未だ足らざる處を補ひ却て仲景の要旨を得る者は其人々の力に在る事にて彼の凡醫の見識なくして古方の旨意を悟らず信疑相半するの間にありて妄りに規律も立たざる曖昧の加減して仲景の本意を亂る者とは自ら天地懸隔の遠ひあるなり。此方は虎翼飲の伏龍肝を去る者亂余が杜選にあらず、又此類方千金外臺に許多あり参照して運用すべし。又按ずるに歸脾湯に木香を伍し或は東垣の茯苓建中湯に青皮木香を加えたる類は右の半夏加茯苓に橘皮を加えたるとは裏はらにして之れは料理に譬ふれば煮肴に生姜を添えて食ふと同じ意味合にて本味はまことに旨く結構なれども其旨きが爲めに反て泥滯の恐れある處をすかして本味の藥力をさら

りと運くらすの意なり。

柴桂加大黃にて經閉を通する事

一女年二十二經閉六月に及べり内二ヶ月は僅かに薄色を見る事半日斗りなりしと云ふ。其人更に虚實の諸症なし。只腹氣爽ならずして腰腕及び小腹冷る事ありと云ふ。先生之を診して柴桂湯加大黃を與えられたり。方函口訣に婦人心下支結して經閉する者に用ゆ奥道逸法眼の經驗なりと説かれたり。

余郷里に在りて經閉の者を治する事數十人世醫桂枝茯苓丸或助大黃を以て通經の劑とすれども經閉の因と其病情に色々の違ひある故治法も夫々の目的を異にして或は柴胡姜桂湯四逆散大柴胡湯後世方の烏芥通氣散或は東郭翁の理氣湯半夏厚朴湯加芎などにて効を收を收むる者多し。之れは其閉づるの所以と閉て後ち病の着く地位と病の形勢等に依て或は其因を除き或は其結ぶ處を解すれば血の滯るべき根柢を除く故程克く循環して自然に通じさする手段にして只一向に破血のみにては治せぬ故桂枝茯苓丸の効ある者少なく又嘔蟲鼠蟲など用ゆべき程の頑症は余未だ經驗せずさて右の諸方を用ゆるに夫れ夫れの目的ある事なれ共此柴桂加大黃を心下支結を目的にして通經させらる働きは合度初めて知る處にして從來姜桂湯四逆散加減等を用ひて全効を收め得ざりし者の中には必ず此柴桂加大黃の的する者ありしを追曉せり。先生多年自ら經驗し發明する者と又博く諸家の經驗を集めて實に活方に富める事拜感す可し。又按ずるに柴胡桂枝湯は婦人諸病に効多き方にして謙齋の醫療手引草にも其事を述べられたり。

回春黃芪湯

一八

疳勞の症其病全く成り淨府湯の病勢とは一等深進して虚甚き者先生回春黃芪湯を與へられ口訣に蒸熱盜汗と五心煩熱とを此方の標的とすべし云々又婦人の乾血勞瘵より來る者に活用して奇効あり是れ舊同僚小島學古の治驗なりと云はれたり。

余從來疳勞を治するに淨府加鼈甲にて効なく終に病勢深進して虚甚しく勞熱解せざる者時々臨んで色々意を以て工夫して諸方を與ふれ共未だ的當を得ずして大抵鬼録に入らしめしが先生の門に入るに及んで初めて此の黃芪湯の功を知れり。但し諸變症を生ずる者は其症に應じて藥方も時宜に撰用せざればならず故必ずしも一方に拘はるべきにはあらぬ共先づは此方を以て審劑となす可し。疳勞の症得ては此黃芪湯の症になる者多し但し疳勞も此方迄に進んでは餘程の篤症なれば治を施す者能々心を用ゆべき事なり。疳勞の治法橋黃年譜に悉く論じたれば此に贅せず。

結毒紫金丹の事

結毒の症に先生正宗の紫金丹を與へらる咽喉及び眼耳鼻等に着く者に殊に効あり但し毒の着く部位と毒勢の劇易淺深等に依て本方には夫々に對當の藥を與えて此方を兼用にするなり。

按ずる夫の名高き五寶丹は虛人及び粉劑求劑の劇藥に堪えざる者を治して奇効ある方なれ共何分高價なる藥にし

て中々誰れも容易には服かぬるなり。されども是非五寶丹でなくてはならぬ病者なれば止む事を得ざれ共其症稍軽くして必ずしも五寶丹を恃まざる者は此の紫金丹にて大抵は濟むなり方中石決明は即ち五寶丹中眞珠の代用とも云ふべし至て便利なる一方なり。

脛骨丸二方

虎脛骨丸二方は栗園翁足痛風脚氣梅毒の痛にも用ゆ。但し方函正傳方の主治に治兩足痿弱軟痛或如火烙從足踝下上衝脛脛等証因濕熱所成者とあり方後に翁曰此方與模瘡秘鑑虎脛骨丸皆本於虎潛丸而有陰陽寒熱之別俱爲不可缺之要方と説かれたり。

余今此方を見て嘗て一男子の病を療して効を得ざりし事を載思せり其人若年のとき梅毒に感染し下疳便毒楊梅瘡骨疼患えざる處なく差て後廿三四歳の頃更に結毒となりて兩手に腫脹を生ぜり左りは臂より肩の下に連なり右は臂肘相接するの所に在り共は附骨疽となりて時々小朽骨を出だし癒えざる者八年に及びり右手は半ば屈して伸びず左右共に膿管常に三四日ありて右は常に稀膿を出だし左は濃膿夥しく出で、其臭氣當る可からず。

其人本々鳥取の産なり數年前より伯州倉吉に轉移す鳥取を距る事十二三里許りなり。然るに右の病症多年癒えず且つ諸症加出して益々困苦するを以て其母向き鳥に在るを幸にし行を裝して來て余が治を請ふ。其瘻一年許り前に牛肉を多食してより下痢を發し荏苒收まらず緩急ありて多きときは晝夜二三十行少きときは五六行大抵水瀉にして

一九

少しく滓を混ずるのみ或は時に穀不化に至る。而して半年前より水氣を生じ偏身軟腫腹勢軟弱脚沈重疼し髌骨より以下附板の間都て火を包むが如きを覺え時々其火が上て腿腹迄もさしこむと云ふ。外面には少しも熾熱の狀なし兼て腰腕拘痛腿膝急終に膝膈微に屈して伸びず足力痿弱して起つ事能はざるに至れり。而して其人神氣語勢は少しも衰えず坐して人と談話するを障外に在て聞くときは恰も無病の人の如し。且つ頻りに食を食ばりて膏粱の品を好む。但し時に下痢至て多く兼て發熱する事ありて其時斗りは氣分も稍爽ならず言語も重く心下痞妨して食も進まず又常に渴多くして引飲冷熱を論せず自ら云ふ前醫虛となして參附の劑を用ゆれば毎も害有て効を見ずと。

余之を診して思ふに附骨疽久しく癒えず口狭く内廣くして蒸膿溜滯し易く排出宜しからず毒氣終に血液に浸入し殊に腸胃を侵し又腰足の筋脈に着て然るならん。され共坑の如く下痢多く殊に穀不化に至り周身水氣を蓄ふる程の形勢にては何の方法も施さすべき事難ければ先づ下痢を治し且つ水氣を除き元氣稍復するに及んで本病の治に取掛るべし。決し眞武湯と思ひたれども附子は害ありと云故雲林の參苓白朮散に御種人參を入れて與へたり。但し人參も効なき事を云ひたれば余が見にては參の害は決して有るまじく思ふたればなり。然るに右の方を與えて未だ十日も過ぎざる間に忽ち下痢收まりて日に二三行になり反て澁る氣を生ずると心下に妨悶を起こし食進まず嘔氣等の症をも始むる故是れは一年餘りも下痢して腸胃の常習となりたる處に倏に收瀉の劑を與へたる害なるべし。

且つ久下痢の割合に比すれば元氣の乏脱も少なく參するに兩三日の景況を以て察するときは胃氣の滯滯を開き小水を誘ひて隨て下痢も自ら收まる意味の劑にあらずんば反て補佐の害を招くならん成程是れ迄參附の害ありと云ひ

しも最なりと更に半夏瀉心湯加吳茱萸茯苓を與ふれども効なし。是に至て再び熟考し先づ下痢と水氣には構はず淡滲の劑にて心下の淡飲を排きて見んとて少しにても心下に妨悶の氣あれば渴も常に増して甚しと云を目的にして茯苓澤瀉湯を與へたれば十五六日過る内に渴症漸くに減ずると心下も開き大便も略調ひて小水分利し追日水氣消すと直面目の羸瘦を現せしが効ある故何にも構はず前方を連用し二ヶ月も立つと大に肉も復する方に至れ共何分結毒の部と足患等は少しも替らず是に於て初めて本病の鮮毒に關係する治方を種々と工夫して居る内病人又弱かに屢多食して之が爲めに再び下痢を發し日に二三十行に及び水氣も盛んに出で、腹部軟滿心下痞悶不食脈弱體疲れて起坐する能はず心神困倦して言語も弱はるに至り且つ腹中微痛もあり。

今度は一等の虚勢を見はしたるを以て前の轍には構はずして更に眞武湯加吳茱萸を與へたれば幸にして救ふことを得て追日に元氣も復する方なりければ最早時分はよしと先づ托裏消毒飲を與ふれども効なく又大百中飲を服せしむれ共日久しくして寸効を得ず。是に至つて大防風湯を用ゆる事若干日に及べ共何分足患少しも減ぜず日を経るに従つて反て増甚するを覺える故余も大に窮して居たりし内止むを得ざるの事故を生じて病人は治を辭して倉吉の住處に歸れり。其後五六月を経て再び下痢水腫を發し遂に鬼薄に編せりと開けり。今思えば此病人などの足患に此正傳の虎脛骨丸を多量に兼用したならば定めて効もある可く假令毒の固着日深きを以て融解する能はずとも適症の薬を用ひたる上ならば後に至つて遺憾なき者を名方を知らざりしは實に自ら愧ちて死者にも面目なく思ふなり。

脚氣に下利を兼ねたる病人の話

二二

一婦人下痢を患ひ來て栗園翁の治を乞ふ。余先づ之を診して詳に症候を尋ぬるに元來脚氣の症にして下痢は病中の兼症なり。され共日に五六行も塘泄すると云ふ故先づ下痢を治せざれば利水に妨げありて宜しからずと思ひ症に隨て半夏瀉心湯加吳茱萸茯苓を付けたれば翁之を診して九味檳榔湯去將吳茱萸を與え下痢の爲めには兼用に香連丸を與えられたり。其後又一婦人ありて治を乞ふ同じく脚氣の症にして下痢を兼ねたり是れこそ先日の體なれとて得たり心ろにて九味加減に香連丸を兼用に付けたれば豈に圖らんや翁之を診して今度は局方の參苓白朮散を處せられたり余は之れが爲めに忙然たる者久しかりし、但し前の一婦は脚氣に罹りしは八月よりの事にして治を乞して九月下旬の初めなり後の一婦は六月より脚氣を得て下痢を始めたは九月中旬よりの事にし治を乞しは十月中旬の事なりし。

熟按するに翁の前の一婦に脚氣を主にして下痢を客治せられしは畢竟病も新しく痺症も強く且つ殘暑も甚だ劇しきときなる故邪氣の疏利が付かねば下痢も減じ難く且つ劇しき下痢にもあらねば別に拘るにも及ばずとして主として脚氣の方を與えられたるなる可く後の一婦は脚氣も古るひ痺症も已に減じたる方にて時候も餘程冷氣になり最早麻痺は治するとも自然に復するの病勢になりて居る故一に下痢を治せられたるなる可し。但し其中にも注意して同じ下痢を治する方中にて薏苡仁の入りたる局方の參苓白朮散とは能くも手の廻りたる工夫にて實に感佩すべし。

外臺柴胡鼈甲湯再按

一男子年三十許六月より發病して九月中旬に至り來りて栗園翁の治を乞ふ。其症咳嗽して痰も有り時々惡寒發熱腹滿心下痞右脇下拘攣最も甚しく季肋の際に當りて微に拘痛し臍傍に至りて拘結塊の如し且つ四五日前より腿脛に水氣を生じ歩行に短氣し食も進まず肌肉稍羸瘦し顔色血澤を失つて青悴せり。恰も大柴胡湯の腹形なれども病勢已に虚に屬し病狀も亦た大柴胡湯の症にあらず何文腹部の拘攣緩まねば咳嗽も水氣も治せぬ者にて其中にて鼈甲劑にあらざれば佳ならずと色々考へたれ共適當と思ふ方を得ずして假に鼈甲入りの一方を付けたれば翁之を診して更に外臺の柴胡鼈甲湯を處せられたり。

按するに此の柴胡鼈甲湯は四逆散に鼈劑檳榔蒼朮を加えたる方にして四逆散の一等拘經甚しく痙癖と云ふべきに至り之が爲めに諸症をなす者に効あり。方函口訣に腹中痙癖ありて喘咳及び諸症をなす者を治するを説かれたり。元來此病人は眞の水腫にはあらず畢竟腹部の拘結甚きよりして疏通を妨たげ水氣をも停滯するの症故此方をば與へられたるなりなるほど腹形は大柴胡湯に似たれ共病勢は稍虚に屬し又四逆散斗にては力及ばぬ此方にて結を通し壅を開くなり殊に檳榔蒼朮を伍してある故水氣を治する方とは云はずして自から利水にも關係するなり。一舉兩全の治法と云ふ可し。

二三

十味當歸湯治驗

一男年三十有餘一日牡丹餅を食して忽ち停滯を覺えて繼で心下より右脇下に相連りて急痛し肩背に徹し甚きときは横臥する能はず起坐して僅かに俯仰し物に倚り苦悶汗出て呼吸難五六日に至れ共荏苒として止まず大便せず。之を診するに脈は割合閉ぢずして反て浮大に屬してあり腹候は四逆散に似たり右脇下擊急最も甚し此腹候にして不大便心脇下急痛する處にては大柴胡湯と行き度思えども其人少しも嘔氣なく胸腹熱なく反て肢體寒きを覽えて足袋を穿き衣衾を重ねて暖を知らず其脈は力少なく其舌は微に自胎ありて滑にして乾燥なく又渴せず病勢虛寒に屬して大柴胡湯の場合にあらずされ共一下を得され共痛みの泄るべきなく此寒意を帯びたる上に急に下さずして姑息日を送りては痛み總腹に及び藏結とも云ふべき疾になるの憂ありと寒濕相兼ね大黃を組みたる方内にて十味當歸湯を思ひ出して之を調與し固く命じて少量頓服せしめれば其夜より痛漸くに緩み翌朝に至りては略ぼ痛なく其午後に至りて大便快通して昨日迄五六日の間の苦痛今日に至りて脱然として忘るゝが如く不日に全快したり。

按ずるに此十味當歸湯は枳實大黃と組て結を破り滯を通し當歸芍藥にて擊急を緩和する中に吳茱萸乾姜桂枝茯苓と伍して溫散利水する處に妙ありて大柴胡湯にも破結緩擊は同じ事なれ共柴胡黃芩と組んで情熱を主とする者とは專はらの働きあり。余が郷にては風土の違ひにてや此の如き症殊に心背或は脇背微痛の病人にて得ては寒飲兼蛔の者多く吐蛔の有無には拘はらず烏梅圓に海人甘草を加え或は去附子にて應ずる者多し。背に徹せず實なる者には大

柴胡湯を與へ其寒意ある者に大柴胡湯行き難き者には四逆散乾姜吳茱萸大黃等にて濟まし來りし症は取りも直さず此の十味當歸湯の佳なる處なるべし。又此病人の如く心脇痛に甚き者は藥汁を頓服すると如何なる的藥にても反て激して却効立たざる故必ず少量頓服の法に宜し亦肝要の事なり。

聯珠飲

聯珠飲は方函口訣に水分と血分と二道に渉る症を治す婦人失血或は産後男子痔疾下血の後面部浮腫或は兩脚微腫して心下及び水分に動悸あり頭痛眩暈を發し又は周身青黃浮腫して黃胖狀を爲す者に効ありと説かれたり。此方は四物湯と蒼桂朮甘湯の合方にして養肝の製せし處にして栗園翁日用の方なり。

按ずるに萎黃の病大抵虛悸短氣浮腫の症を同じくすれ共自然形勢と其由て來る處の異なる者ありて處方も夫れに應じて各宜しき處あり。或は六君子加味或は南陽鉞砂湯或は此聯珠飲等なり。六君子加味は本と胃の氣の虛より血分の榮養不足して來る者に宜し。故に專らに氣藥を伍したり鉞砂湯も略ぼ同因なれ共是れは何分胸胃の間に水多くして兎角上部に衝騰する者なり。故に蒼桂朮甘湯に牡蠣鉞砂等を加えて鎮墜を主とせり。此聯珠飲は脫血の爲めに水其依る處を失し周身稀水多くなりて兼て上衝する者なり故に四物湯の補血に蒼桂朮甘湯を合したるなり是れを大略三方の別とす。萎黃の疾を治するに此外瀉脾湯加龍骨牡蠣茵荊湯等の諸方も多く又附子劑をも用ゆるに至るもあれ共先づは此三方の者多き故今此三方の別を論じて後日の按に備る而已。

葛根湯加芎黃

葛根湯に芎黃散を合し煎服して腦漏初起或は經年と雖共衰候なき者及び腦漏と云迄にもなく但鼻より臭涕腐敗の者を出して止まず鼻淵など稱する症に用ひらる大抵化毒丸を兼用せらるゝなり。又項背強ばること甚しく轉顧し難く之れが爲めに頭痛及び臂肘痺痛を生ずる者にも用ひらる。又眼疾に此方の効ある者あり項背に瘀血ありて眼目赤痛する者眼科にて此方を用て桴鼓の如しと云はれたり。一婦人五十有餘年より項背強急殊に劇しく頭痛目眩腹勢詰背拘急上盛下虚の症ありて終に爛弦風の症を兼ね患ひし者を此方にて治せられし事あり其他項背強ばるが爲めに諸症をなす者に運用せらるゝ事あり使ひよくして効多き方なり。

按ずるに同じ葛根湯加味の方にてても千金獨活湯と此方とは虚實の分あり此方は毒を破りて鮮凝するを主とし獨活湯は枯を滋ほし瘰を疏して融通するを旨とするなり。又此方には眼疾を治することは實に良法にして從來此症には屢窮せし處なり芎黃散をば屢用ひて小効を取る事あれ共これは誰れも能く行ふ處にして葛根湯に合し煎服するの排にして大効あるに如かず。此の場合に於ては他に代用すべき方はあるまじくと思はるゝなり實に感戴すべし。

當歸四逆加吳茱萸生姜湯

痲症の病人或は腰痛或は小腹攣痛して夫より心脇下にさしみ痛む者栗園翁の秘訣にて當歸四逆加吳茱萸生姜を與

えられ寒多き者には附子を加えて用ひらるゝに共に妙効あり。

當歸四逆湯を痛に用ゆる事は天下の醫皆な行なふ處なれ共此の衝逆するを目的にして加吳茱萸生姜を用ゆる事は未だ嘗て知らざる處なり。余が郷にも此症至て多く此の輕便なる口訣を得たる上は後來は別に思慮を煩勞するにも及ばずして此症を救ふこと至て易すかるべし。又按ずるに此方の衝逆に効あるは全く吳茱萸生姜の働きなり此の如く手近く使ひよき處の方を取て仲景未だ言はざるの秘を發する事翁の活用功妙なりと云つべし。又此症にして兼て微邪に感じ表鮮して後咳嗽止まず寒飲の所爲に因る者此方中更に杏仁を加えて與えらるゝ奇妙に應効あり。

苦酒湯

嚔喉風及び時行咽瘡の症腫痛或は糜爛し甚き者は懷蝕或は自微を生じ嚔口瘡の如くにして咽中秘塞語言飲食する事不能聲音嘶啞する者に栗園翁は半夏苦酒湯を與えらるゝに咽塞忽ちに通じ隨て收瘻の効を奏する事甚だ奇妙なり尙ほ方函口訣の説を見合す可し。

按ずるに苦酒湯の咽瘡を治するの方なる事は孰も知りながら之を信用する事翁の如き者を聞かず。畢竟藥味の奇ならざるを侮りて之を疎漏に見做すに出づれ共克々考れば半夏苦酒なぞの辛辣透竄の品を單用する事故其即効あるも理はりなり。斯く手近き處にある良方を畫餅に屬し度外に置いて究明する事なく其殊功を知らずして反て之を遠きに求むるは古人の遺意に戻ると云つべし獨り此方のみならず他にも如此の弊の數多之れあらん事を恐るゝなり醫を

なす者深く意を用ゆべき處なり。

千金斷痢湯にて白帶下經久の者を治せし話

神林氏曰く一老婦白帶下經久止まず滑脱漏下する事男精の狀の如く臭氣當るべからず諸帶下を治する方法を施して癒えざる者栗園翁千金斷痢湯を與えられしに奇妙に全治せし、凡そ白帶下の症梅毒等の因なき者は諸痢腸垢を下す者と前後の異はあれ共其理は則ち同様に見做して治を施す可き者あり又龍骨を白帶下に用ゆる事は古人既に其按ありと語られし由。

金匱風引湯

三浦氏曰く風引湯冷水を以て散服し大人小兒痢瘡瘧症直視等の症熱氣熾盛の者を治して清熱鎮墜の効妙なりと風引湯は則ち金匱熱熱癰痢を治するの方なり。

海金砂を尿血に用ゆる事

神林氏曰く栗園翁嘗て尿血經久止まさりし者に海金砂を末服せしめて奇効を取られし事ありと。右の三方は皆奇按良藥にして果して其効あるべく思はれされ共余未だ親見せざる處なるを以て幸に二氏の言に便て之

を此に記載して以て後按に備ふと云ふ。

治脚氣諸方の事

栗園先生脚氣を治せらるゝの諸方は其表裏虛實上下輕重等の症に隨て應機活變極りなしと雖も今一々之を詳悉舉載するに暇あらず因て其最要なる者にして從來未だ經驗せざる處の方を摘出し加ふるに方函口訣の文を以てして其分別を標する事左の如し。

九味檳榔湯

口訣に曰く此方は和方の七味檳榔湯の積實を去り厚朴木香蘇葉を加えたる者なり脚氣腫滿短氣する者唐侍中一方よりは服し易くして効あり世醫檳榔散を用ふれ共此方よりは劣れり。

小檳榔湯

口訣に曰く此方は脚氣嘔氣ありて衝心せんとする者を治す併し唐侍中一方に比すれば其症輕し故に小檳榔の名あり又此症にして水氣上部に盛なる者は犀角旋覆花湯を與ふべし。

唐侍中一方

口訣に曰く此方は脚氣衝心の主力なれ共虛證には効なし。大抵胸氣急し其氣上衝せんと欲する者に効あり。若此方を用て其腫益盛になりて來るは木菜湯を兼用す可し。實する者有持桂里は大黃を加えて其効速なりと云ふ。若偏身洪

腫して心下苦悶する者辻山崧は越婢湯を合して用ゆ。余は木芥を加て雙解散と名づく朱氏集驗には桔梗を加えて鶏鳴散と名づけ脚氣の奮劑とす。

鶏鳴散

中村氏曰く唐侍中一方の症にして心胸氣滯肺氣不利聲音濁啞等の症ある者に翁は此方と與えらる。是れ一味の桔梗あるを異にする所以なり衝心の候盛になり。て之が爲めに肺部急迫する者とは自ら別あり。

雙解散唐侍中一方の條下に見えたり

滲濕湯

口訣に曰く此方は脚氣下部に専らにして腰以下冷痛微腫し痿弱せんとする者を治す。大抵は桂枝加朮附湯にて治すれ共虚候毒氣を兼る者は此方に宜し。

檳榔散

口訣に曰く此方は年々春夏の交脚氣を發し兩脚微腫或は疼痛をなし步履自由ならず微熱短氣ある者に効あり余嘗て關老松平周防侯毎年脚氣にて困難せしを此方と與えて全癒せり。陳修園は此處を鶏鳴散を用ふれ共此方を以て優れりとす。

中村氏曰く此方脚氣毒の筋骨に著て沈滯する者を治す。故に毎年之を患る者に効あり。余按ずるに八味丸の症の如く下元虚血燥等の爲めに毎年脚氣を患ひ患ふれば必ず麻痺多く痿軟の症をなす者とは自ら其別ある可し。

治脚氣冷毒問云云一方

口訣に曰く此方は唐侍中一方の症にして嘔吐有り上氣欲死者に用ゆ嘔氣の模樣犀角旋覆花湯に似たれども彼れは水氣上部に盛に顯れて有り此れは水氣表に見れず濕毒直に心下に衝て嘔吐する者に宜し。

犀角旋覆花湯

口訣に曰く此方は脚氣の水氣上に胸腹に盛にして嘔氣を發し或は氣急喘息する者を治す、蓋し此方と沈香豁胸湯とは脚氣上部に盛にして衝攻せんと欲する者を治すれ共沈香豁胸湯は氣急息迫を主とし此方は水氣嘔逆を主とするなり。

蘇恭一方犀角湯

口訣に曰く此方は脚氣衝心膈熱甚く困悶する者を治す。

犀角麻黃湯

口訣に曰く此方は風毒脚氣の主劑なり風毒脚氣の候は千金及聖惠に委しく見へたり濕氣外邪を挾て發熱腫滿する者此方に非ざれば効なし。若此症誤治し内攻する者大陷胸湯に非ざれば救ふこと能はず。

沈香降氣湯

口訣に曰く脚氣心を衝くの症に桑白皮湯は吳茱萸湯等の苦味を惡て嘔吐する者に効あり。

吳茱萸湯加茯苓

栗園翁脚氣衝心鎖まらず其人精氣已に虚して水滯依然たる者に吳茱萸湯加茯苓を與えて黒錫丹を兼用せらるゝに間々救を得る者あり。余も嘗て東洞翁の脚氣に吳茱萸湯を用ひられし事を聞け共親見せしは今日を始めとなす。蓋し吳茱萸は脚氣衝心に効ある薬にして古來脚氣諸方に此薬を伍する者半に過ぐ木茱湯は其最なる者なり故に其虚なる者に入參を組みたる吳茱萸湯を與ふれば挽回劫水の効を奏する者あるは理りなり。

三和散に薏苡仁を加ふる事
栗園翁は脚氣の三和散を與ふべき者には薏苡仁を加えて用ひられし、解凝疏滯の効一層著しくして面白き工夫なり。右十餘方は余栗園翁の門に遊ぶに及んで始めて見る處の者にて發明する處甚だ多し因て摘録して以て後按に備ふ。

吐水食症諸方

堅中湯 主治に曰く治虚勞内傷寒熱嘔逆吐血

口訣に曰く此方は小建中湯の變方にて其用廣し。古方家にては小建中湯加茯苓を用ゆれ共此方の伍用はるかに勝れり。

按ずるに此方は元來小建中湯の變方なる故膏裏拘急して之れが爲めに主治に載する症をなし病ひ陰位に在る者に行くなり、今嘈雜吞酸の症ある者にも用ゆれ共右意味合より運用するにて胃の自傷より起る眞の反胃滯糞とは自ら病性に異なる處あり。

四逆散吳茱萸良姜

按ずるに此方は脇下及び任脈に拘攣あり心下痞妨即ち四逆散の腹候にして之れが爲めに胃の運化を妨げられ腹痛或は腹痛なく嘈雜吞酸吐水食する者の輕症を治す。説前に詳なり。され共此症深くなりては胃の自病になりて眞の滯糞反胃の症をなす者あり。堅中湯に比するに病根今少し上に位する者と知る可し。

茯苓瀉心湯 方後に曰く一方加吳茱萸牡蠣甘草治久腹痛吐水及食漸爲滯糞然不減飲食則無驗

口訣に曰く此方は半夏瀉心湯の變方にして飲停多く心下痞鞭する者に宜し。又滯糞吐水の嘈雜甚き者に用て効あり。按ずるに此れは眞の胃病にして胸胃蓄熱する者に之くなり。

檳榔散

口訣に曰く此方は胃中不和水氣ありて吞酸或は毎に吐水する者に用て効あり。蓋し茯苓飲の症と混すべからず。彼れは停飲宿水を吐して後心胸間に虚氣滿して不食する者に用ゆ。此方は吐水すれば一旦快然となる者なり按ずるに此れも胃の自病にして胃質に凝結急縮する意ありて運化不足蓄水する者なる可し。故に檳榔を主薬にして解凝疏通する處あるなり。

苓桂甘棗湯 或加吳茱萸 口訣

曰く此方は臍下の動悸を主とす大棗は能く臍下の動を治する者なり云々。此方もと奔脈の水氣に屬する者を治するが主なれ共運用して滯飲に與えて特效あり委くは時還讀我書に見ゆ

按ずるに此方は同じく瀉薬を治す中にも緩和鎮水を主とする者なり亦臍下動悸奔衝の勢ありて然る者を目的にするなり又按ずるに古方を運用する中にも此方にて瀉薬を治するなどは最も活妙なる働きと云ふ可し。

良 枳 湯

口訣に曰く此方は苓桂甘棗湯に良姜枳實甘草を加る者にて飲瀉の痛ある者に用ゆ苓桂甘棗湯の瀉飲に効あるは辻山崧の経験なり。

按ずるに此れは苓桂甘棗湯に比すれば水飲の固着したる者なり。故に枳實良姜半夏を加えて燥温温散解凝を兼ねるなり。

安 中 散

此方世上には瀉薬の主とすれども吐水甚しき者には効なし。痛み甚き者を主とす。反胃に用ゆるにも腹痛を目的とす可し。

按ずるに從來瀉薬反胃に此方を用ひて輕症にも効なき事ありし者は右の目的を知らざりし故なり。又此を婦人腹痛或は男子吐瀉盡て後心腹刺痛瀉薬効なく飲を挾む者に用ひて大効を取りたりしは自ら栗園翁の法に符合せしと云べし。

丁香茯苓湯

口訣に曰く此方は胃中不和より滯飲酸敗を生じ遂に翻胃状をなす者を治す。生姜瀉心湯よりは一等虚候にして久積

陳寒に屬する者に宜し。今翁に在て之を試むるに右の症にて噎氣多く微下痢腹鳴等の症ある者には佳々なり。

乾姜人參半夏丸

口訣曰く此方は本惡阻を治する丸なれ共今料となして諸嘔吐不止胃氣虚する者に用て捷効あり。

按ずるに小半夏加茯苓湯と大半夏湯と此方とは嘔吐を治するの主劑にて少しも水食を受けざると云ふ處にも用ゆ。但し三方に各其之き場有て小半夏加茯苓湯は鎮水降氣を兼ね大半夏湯は補氣緩和を兼ね此方は補氣温散を兼ねて半夏の功を働かする者にて虚實を比すれば小半夏加茯苓湯は尙ほ實にある者にして大半夏湯は虚となし此方は又一等虚深き者なり又大半夏湯と此方とは同じく虚症なれ共少しく其趣きを異にする處あり故に小半夏加茯苓湯を用ひて嘔吐止まず虚に陥る者に大半夏湯に移る者と此方に移る者となるなり能々分辨す可し。

附子粳米湯

方後に曰く一方加丁香宿砂治胃反甚服藥而翻者又胃寒吃逆不止

口訣に曰く此方粳米を用る者は切痛を主とするなり。外臺腹痛に稗米一味を用ゆ微とすべし此方寒疝の雷鳴切痛のみならず瀉飲の腹痛甚者に宜し。

按ずるに此方は丁香茯苓湯に似て腹痛甚しく安中散に比すれば胃中虚寒の者を主とするなり。

吳 茱 萸 湯

口訣に曰く此方は瀉飲を下降するを主とす云々肘後にては吐醋嘈雜を治し云々凡そ危篤の症瀉飲の上溢を審にして此方を處するとき其効舉て數え難し云々又久腹痛水穀を吐する者此方に沈香を加えて効あり。

按ずるに大半夏湯乾姜人參半夏丸料は其病深き者とし附子粳米湯及此方は病急なる者とす。而して附子粳米湯は脇腹刺痛を主とし此方は胸中滿悶を主とするなり。

起 癢 丸

此方は久腹痛水飲固着に因る者を治す故に翁は之を反胃群囊虛寒未だ甚しからざる者に用ひらるゝに必ず効あり説前に詳なり。

靈 砂 丸

主治曰く主治上盛下虛痰涎壅盛頭旋吐逆反胃心腹冷痛最能く鎮墜神丹也或曰治痢而有吐者。今翁の此丸を大人反胃小兒吐衄の者に用ひらるゝを見るに多くは飲食すれば必ず吐逆して少しも保たざる程の場合に在るなり鎮吐の効最も著妙なり。故に多くは乾姜參夏丸小半加伏大半夏湯等に兼用せらるゝなり。

右の諸方は栗園翁反胃群囊病を治せらるゝ方中にて大要なる者を摘録する處なり。

桂 枝 加 芍 藥 乾 姜 湯

腹腰痛急後重下痢腸垢を下すの症にして病ひ陰寒に屬し所謂太陰部位にある者に栗園翁は桂枝加芍藥乾姜湯に與え若し稍實して尙ほ下を欲する者には少しく大黃を加えらるゝに至て捷効あり。

按ずるに此れは從來方彙の白朮和中湯を用ひし處にして白朮和中湯の方は當歸芍藥苓連橘皮朮木香甘草の九味にて隨分面白き方なれ共桂枝湯加味の古方にして且つ使ひ易きの捷便に加かずされども白朮和中湯も苓連朮苓と伍

して清熱利水の功ある故時によりては各其長ずる處もあるべし暫く録して参考に備ふ。

金 匱 續 命 湯

三浦氏曰く老人及び平素虛燥の人併寒に感じ惡寒多く熱不發陰症に似て陰症にあらず全く皮膚緊閉に屬し其脈緊にして力あり諸發汗の劑を服して徹せず日數を經れ共尙ほ少陽陽明の候なくして太陽に位ひし其人澤液の乏しく内氣振はざるに因て表汗達せざる者金匱續命湯を與えて奇妙に發汗を得殊効を奏せし事ありと。

按ずるに此方は大青龍湯に滋潤振氣疏通等を兼ねたる方とも云ふ可き者にして右の症に發汗の効ある事ば實に其道理有て面白き運用なり

奔 豚 湯

栗園翁は金匱及び肘後の奔豚湯を能く使用せらるゝに効驗多し。方函口訣にも獨嘯菴は奔豚氣必ずしも奔豚湯を用ひずと云はれたれ共余が門にては奔豚湯必しも奔豚を治するのみならずとして活用するなりと説かれたり。

按ずるに此奔豚湯の之く處は洋法家にては子宮衝逆だの舞踏病だのと云ふなり。此等の症に從來は奔豚湯を用ひずして種々の手段に苦勞せしなり。郷里にては奔豚湯を用ゆるの醫者少なくして余も經驗なき故なり今翁の門に入るに依て初めて其功效を知れり亦一の得益なり。金匱方と肘後方の別は方函口訣に詳なり。讀で知る可し。

炙 甘 草 湯

心動悸心膈血不足に因る者にして諸症を兼ね或は咯血咳血の症にも翁は炙甘草湯を運用せらるゝに効驗多し頸部結

核癰腫に似たりし病人を此方を與えて奇効を取られし事橋黃年譜にも載せられたり。尙ほ方函口訣を讀て其功用を知るべし。

按ずるに心動悸炙甘草湯と云ふことは誰れも知る處なれ其此の如く功用の廣きことは翁の門に入て初めて曉れり。又按ずるに心動悸を目的にして此方を使用するに當ては必ずしも金匱附方に説く處の餘症には拘はる處にならざるなり。

溫經湯

胞門虛寒と云を目的にして翁の溫經湯を用ひらるゝを見るに亦功效多し其治する諸症は口訣に詳なり。

從來は金匱の主治に據て此方を用ゆるに或は効あり。或は効なかりし者は畢竟其原因と症候とのみに拘はりて目的を知らざりし故なり。今翁の門にて入方函口訣の文に及て方後の主治に據るべしと云ひ又胞門虛寒と云ふか目的との秘を得て初めて此方の確功を曉りたり。

柴芍六君子湯

柴芍六君子湯も翁の屢用ひらるゝ處なり四逆散の症にして胃虛の者と云が目的なり。委き事は方函口訣に載せられたり。

按ずるに四逆散の症にして胃虛の者に利く譯は枳實の破氣を用ひずして六君子の補氣利水ある故なり。余頃日中新井村の矢嶋彌平次なる者年四十七世寒を憂ひ姜附益氣湯を用て僅に癒え繼で宿疾の蟬敗痛を發し困食進まず脇

下攀急石最も甚しく硬結して通例ならば四逆散吳茱萸湯をも用んと思ふ處に此方を與えられたれば二三日にして拘攣緩み痛止し食氣進んで全癒したり實に良方なり。

瀉脾湯

一男年六十少しく瀉作下れども必ず動悸短氣して業を取る事能はず兼るに心下膈痛し皮膚澤を失し唇舌刮白之を診するに心脇下滿して攀急せり。如此の者三年許なりと云ふ余先づ之に柴芍六君子湯を附けたれば翁更に之を診して瀉脾湯加龍骨牡蠣湯を與えられたり。

余は右の定案を見て後に方函口訣を出だして讀むに之まぎれもなき瀉脾湯龍蠅の症なり預して口訣も讀まざるにはあらね共經驗なき方のことは多くは忘却して居る故此の如き誤あり。柴芍六君子湯を附けたるは畢竟六君子加三味より移し來る處にして翁にも此治方なきにはあらね共只心脇下の滿を客となせしが反て主症にして瀉脾湯の目的とする處なり。此瀉脾湯の目的を知らずして誤を致せしなり。故に假令柴芍六君子湯の良方なるを知れ其他に又良方のあるを知らざれば牽強附會なる處方になりて此の如き取違ひして主客を混するなり。愼まざるべからず今誤に因て反て一益を得たり依て是に記載して後考に備ふ。

半厚朴湯加浮石

膈噎の輕症及び頑固の梅核氣症に先生は半厚朴湯加浮石を與えらるゝに効あり。此方にて膈噎の治驗は橋黃年譜にも載せられて論説もあり面白き事にて此加味の如きも從來未だ知らざりし者なり。

按ずるに半夏厚朴湯の疾は金匱に婦人咽中如有炙轆とあり炙轆必ずしも半夏厚朴湯を用ひず半夏厚朴湯亦必ず炙轆を治するのみならずと云共元來此炙轆の症は氣結より起るを常とし氣結は婦人に多き者故自然婦人門に載せたると思はる。今之を運用するに當ては必ずしも婦人男子及び炙轆の如きの有無には拘らず故に東郭家にても此方に加味して理氣湯と名づけ廣く胸中氣結の病に用ひられし事なり。今浮石を加えらるゝも氣結の凝を爲して發固なる者を解凝するの意なり膈噎も多くは氣結津枯の人に在る事にて此方の間効ある所以なり。一層頑固も強く虛枯も甚き者は附子に非ざれば動かす。故に支醫の利膈湯を用ゆるるれ共此病は元來雜症にして容易に効を得難し加浮石の方は至て面白き手段にて余も歸郷の後之を以て時に効を得る事あるべし因て之に掲載す。

明醫指掌 薏苡仁湯

濕邪の支節疼痛する者に薏苡仁湯を用ゆるゝ者至て多し。其目的は方函口訣に委しく説かれて發表の場合も過ぎ又熱動なくして越婢湯などの清涼の場にもあらず又頑固虛を帯びたる附子の温散融解を主とする者にも非ざる處へ之くなり。

按ずるに此方は寒熱虛實表裏の間にありて何れへも偏する處なくして和かに解凝利水除濕の組方にて實に重寶すべき良方なり。

小柴胡湯加竹筴麥門黃連茯苓

小柴胡竹筴連苓は加味小柴胡湯の滑石を去りたる者にして其説は委しく方函口訣に載られたり。今時の疫熱には實

に關くべからざるの一方なり。

按ずるに小柴胡加知母石膏或は加黃連石膏等の形あれ共清涼に過ぐれば稍虛を催かさんとする勢ある者にして從來小柴胡加知母麥門など之きし處に用ひて能く膈熱を清し潤下利水の効ありて一段面白き働あり。故に參胡芍藥湯升陽散火湯或は竹筴温胆湯又は柴胡三白湯參胡三白湯などの前に在て其變動を見合はするなどの間に此方の行くべき者多しとなす。或は此方を與て持重する中に解熱するもあり。實に味ある一手段なり其變に至つては余が預して論じ得る處にあらず。

變製 心氣飲

變製心氣飲は分心氣飲の變製なる事方函口訣に載せられたり。其之く所は本方と大同小異なれ共彼に比すれば鼈甲枳實吳茱萸など、伍して破結鎮水の効一段優れり。

余が郷里の西山幸穴なる者の妻年三十有餘産後水腫を患ひ甚だ危迫に及びしが僅かに癒て三年後又産して其跡了々たらず、一年許の後に及んで又水症を發せし其症肚腹都て膨滿し恰も水蠱氣蠱に似て腹皮緊ならず而して心下痞脹する事甚しく形如覆杯大さ斗の如く確乎として分界有て堅きにあらず革囊に水を盛りて口を緊括せる者の手ごたへにて少しも之を接せば胸中に激して苦悶堪えがたく而して臍上以下は軟弱なり面部肢體悉く浮腫して小水不利大便塘して上膈日に五六回に及べ共少しづゝ通するのみにて快利せず心胸痞塞して食を欲せず微渴して少々湯水を飲むのみ肢體浮腫多きときは裏患大に緩になり少なきときは苦急至て甚し且つ或は時に項肩強り或は時

に背脊痛み或は時に脇下急痛す動悸の甚しき事は實に比類なき事にて虛里奔馬の如く腹怒瀉の如し醫手掌を以て中腕の緊滿せる部を按で居れば打上げられて肩を撞るゝが如く覺える程の動氣なり。

舌胎は少しもなく脈は動悸の緩急に隨て動急なるときは脈沈細伏候ふ可からざるに至り緩なるときは脈も浮んで來る。此諸症緩急あり發するときは必ず咳嗽を加えて微喘す。而して右脇下季肋に迫る處一塊有て横たはる諸症の緩急の本は必ず此物の縮服に起るを覺ゆと云ふ。醫を轉する者十餘輩或は以て胃病となし或は以て心臟病となし或は以て肝臟病となし或は以て癩麻質斯性となし或は以て宿飲となし或は或は或は血分と云ひ種々に手を盡せとも洋家も之を治する能はず。漢家も効を收むる能はず。如此者一年半餘も亦嘗て之を治する者半年許或時其惡寒を斂ぬるを以て桂姜薑草黃辛附を與えたれば殊の外動氣に激して困悶せし、余心中甚だ愧たれ共幸にして病家其附劑の故たるを知らざるを以て咎を逃れたり。後には分心氣飲を用ひ之にては稍効を得たりしが何分右脇下の塊癖は依然として動かざりしが三四ヶ月にして又復發し漸々羸瘦を加えたり其前に木防己湯を用ひし醫も一旦は効を奏せしと云へり。昨春余先生の門に遊ばんとて東行すと聞て右病婦の夫幸六來て悦を述べたるとき余之に向つて來春は良き治方を土産に取て歸りて與ふべし死せずと待て居られよとて訣れたりしが其後五六月を経て秋に至て終に死亡せりと聞きしとて宿元より余に申し送りたり。此手の病者も往々ある事而て此婦は殊に難症なりしが今思へば此の變與心氣飲を知て居たならば之を與えし者にてありしをと後悔云ふ斗りなし。假令病重くして良藥も効を奏せず終に冥泉に入るとも適當の方を用ひて置けば遺憾なきなり。

得益錄 下篇

一男年十九四五日前與風感冒したる心地せしが續て膈腸腹大硬結し痛みて歩行し難く又正坐する事不能色も變せず
 熾熱も無し但脈は數なり。大便は二日に一行位にて小水は稍不利の形なり。時は十二月一日にして舊十月の中の節なり余は畢竟無汗の變にして水毒足に結ばざるゝの一症として越婢加苓朮附を與へたれば栗園翁之を診して聖惠檳榔散に木菜丸を兼服させられたり。

翁曰く此人はまぎれもなき脚氣にて水血凝結の甚きなり。寛慢にすれば忽衝心する者なり故に今此方を服して四五日に速効を得たり越婢を附するは皮表の見と云べし。

一婦人年四十九、四年前より一疾得諸治効なくして來て翁の治を乞ふ。余先づ之を診して越婢加苓朮を附したり其症毎曉三四時の頃より少しく身熱を覺えて盜汗出て衣を浸たす事延て正午時頃に至て自ら止む夫れ迄は目覺ても止まず若し起き出で、動作すれば必ず止めども止めば必ず頭痛或は肩背強急或は諸肢節疼痛等をなして反て苦む故忍で正午頃迄は辟臥に在りて自ら止むに至る事毎朝務めの如くすと云ふ。飲食は常に變りたる事なく大便は四五日に一行なり月經も順なり體質は肥滿したる方なり翁之を診して當歸六黃湯に當歸龍薈丸を兼服せしめられたり。

余問て曰く此人は濕熱の變症と見たり。但し毎深夜より正午時頃に至るまで靜臥して汗の自ら止むを待たずして半途に起き出づれば汗も止んで隨て必ず各部に疼痛を發するは疑はし畢竟濕邪の肌肉に俯する者と見たる故藥力を

以て發表及び利水に導て肌肉の毒を解すれば佳なり、汗の出るには構はず、越婢加苓朮を附けたるなり、願くば高教を示し玉はん事を。

四四

翁曰く此婦は血熱鬱蒸の自汗なり、大風瀉の汗なれば必ず止むとき無く、或は渴して小便自利、四肢浮腫等あり。此症は血分に屬する故、曉天より午前熱蒸すれば止むなり、これ熱入血室の晝日明了、暮則譫語と同様なり、すべて朝の内、頭痛、頭汗などある者は皆血症なり。當歸龍薈丸を服用するは、此人數年の痼疾、故其蒸達の氣を清肅して下降せしむるの手段なり、此丸の盜汗を治する事は、喻昌が寓意草を見て發明すべし。

一男子年五十許、二年前より兩眼熾痛を患ひ程なくして、大勢は減したれ共、其跡荏苒として癒えず、尙ほ赤脈多くして、瞳上に薄き白翳を生じ、明視ならず、今は少しも痛痺なしと云ふ、余先づ之を診して、結毒眼となし、解毒劑眼加減に、結毒紫金丹を兼用に附けたれば、翁之を診して、明朗飲加大黃に、明目地黄丸を兼服せしめらる。

問て曰く病人梅毒の因ある事を秘するとき之を診して、結毒眼となして幸に中る事あれ共、原來其診法に熟練せざる故、其誤如此者あり。願くば赤脈白翳如此症にして其因を問はず、現症に依て結毒眼と明朗飲の之く者とを辨するの術を示し玉はん事を。

翁曰く結毒眼は、瞼孔に瘀血游水を蓄し、或は量黃を生じ、揮發腺腫となれ共、赤脈熾痛などなし。間赤脈を發する者あれ共、痛は決してなし。此症は風眼たちの輕症にて、一旦熾痛は去りたれ共、餘爛解する能はず、血氣之れが爲めに畏縮する故、明視ならず。故に此方にて清下し、地黄丸にて血氣を助くるなり。此等の鑒視を誤り、土茯苓龜板などを用ると

きは、彌血燥して治する能はず、能々心得べし。

一男年二十七、四年前より一疾を得たり、寒氣の交に至れば必ず聲啞す。咳嗽、疹痛等の候なし。其外少しも餘症なし、但發病前少しく梅毒を患ひしと云ふ。余依て咽喉結毒となし、結毒紫金丹を兼用に、桔梗解毒湯を附けたれば、翁は解毒劑加桔梗當歸麥門には、響聲破笛丸を與へられたり。問て曰く同じく梅毒にして、桔梗解毒湯の之く者と、解毒劑加味に宜しき者との別を請ひ問ふ。

翁曰く桔梗解毒湯は、咽喉の腐爛を止め、鼻頤の凝結を解するを主とす。若結毒にて痛甚き者は、喉癰湯に非ざれば効なし。此人は梅毒性なれども、其毒較く春夏の際に蒸發して、表氣疎する故、聲音に故障なく、秋冬は腠理密になる故、毒瘵して聲啞するなり、桔當麥を加ふるは、潤燥の策なり。破笛丸を兼ふるは、聲官の分利を要するなり。

一婦年五十三、壯年の時より肩背強ばる事甚しく、之が爲めに兩手舉動に便ならず、且つ痛み又麻痺して、夜に入り休臥すれば更に痺痛甚しく、又時に背脊迄も痺痛する事ありと云ふ。兩脇下も餘程引きしめたる、癰急ありて、腹勢は背に貼きたる方なり、余千金獨活湯を附せしに、翁之に葛根湯加芍黃を與へられたり。

問て曰く葛根加芍黃は、頭腦に關せざる者にも之くべき事ありや、願くば其秘を傳へ玉はん事を。

翁曰く葛根湯は、項背強急を目的とす、此人肩背強か主證にて、其餘勢が兩臂に及び、甚きときは、脇下迄も癰急す、故に其主證を治すれば、他は隨て治すべし、往年心下痞塞して、微痛し、肩背までも苦む者あり、衆醫柴胡瀉心の劑を用て、効なし、磯野弘道、葛根加大黃を用て、速に癒ゆ。又肩胎に瘀血ありて、目赤痛する者、眼科にて、葛根加芍黃を用て、桴鼓の如し、此の意

を能々合點すべし。

一男兩五歳なり三歳のときより身體小蒼を發して疥癬の狀の如く荏苒として癒えざりしが此年七月頃より中暑の狀にて不食渴して湯水を好み下利止まず九月下旬に至り身體痺勞し之が爲め皮膚の蒼發達の勢を失ひ忽ちに沈没して更に眼疾に變じ痛て聞く能はず。如此者十日許來て治を乞ふ。之を診するに赤脉多く瞳孔色變じて雲暗少しも視えざるが如し。眼球乾燥して外膜皺を生じ左眼最も甚しく右眼稍潤ひあるのみ。下痢瘦削の餘とは云へ共僅かに十日許の内此大患に至りて餘程の急症なり。且口中には嚔口蒼を生ぜり。余之に腎氣明目湯に下痢の手當に香連丸を附し又再按に先づ七味白朮散を與ふべきやと記して出したれば翁之を診して益氣聰明湯に兼用龍胆胡黃連丸を附せられたり。此兒は至て大患にして命は救ふべけれ共眼は到底不治なるべし二三日して再び連れ來りて痛みは大に緩に見ゆると介者の云ひしが其後は來りしを見ず如何せしにや。

問て曰く此病兒は固より體毒多く日久しく發着して是れが爲めに血枯の漸もあるに八月より下痢止まず更に腹力下陷して瘡の外幅の勢衰え依て外面枯れて内に陥り轉じて眼に着き且つ眼球の乾燥甚きを見れば益血枯の症なるを知るべく身體の衰弱も甚き故毒あれ共攻劑は用ひ難く補血に輕く疏毒を兼ねたる方に佳ならんと思慮して腎氣明目湯をば付けたるなり。去りながら今眼も急なれ共下痢收まらずしては滋補の効も立つまじく益々乾燥も甚しくならん事を恐るゝの心もある故先づ七味白朮散は如何と再按せし元來此の如き眼疾には未だ經驗なく又腎氣明目湯も益法聰明湯も從來用ひたる事なき方故未だ其行き場と功用とを會得せず伏て高教を乞ふ。

翁曰く中焦の津液不足して眼精不榮の者を益氣聰明とす。下焦血氣不足虛火上炎して昏暗する者を腎氣明目とす其餘は方函口訣を讀て目的を定むべし。

一男年四十七年四ヶ月前より兩眼赤脉腫爛膠膜滲出て或は痛或胞裏砂を包むが如く瞼上白翳右んど明を失し荏苒差えず身體羸瘦し飲食進まず脉數時々背より肩項を衝て拘急氣俯し又惡寒せずと雖共身常に寒し此人二十年前より屢眼患あり毎に治を施せば久しからでして差ゆ。當年は其患殊に劇しくして終に此に至ると云ふ。余之れに謝導人大黃湯と兼用に結毒紫金丹を附けたれば翁之を診して煎劑を解毒劑眼加減に改ため更に點眼藥に精花膏を與えられたり。

問て曰く此病人は解毒劑加減に歸するの眼と見たる故兼用に紫金丹を入れたる程なれ共先づ大勢を挫きて後に主として解毒に係る方宜しかるべく又痛もあり眵涙も多く何れ時氣より誘はれて來る者と思ひし故先づ大黃湯を附けたるなり又精花膏の主治及び目的を問ふ。

翁曰く精花膏は膿翳を去り積熱を清涼する者なれ共金石の劑故虛眼或は積年の白翳などに點する時は反て激動するなり。天行赤眼など初めに點すれば反て激す。先づ錄海煎にて洗滌し其後赤脈云らず昏暗或は雲翳を生ずる者に點すれば即効あり此意を了解して施す可し。

一女年十四腰痛屈伸して起臥に難やむ者十日許余之に桂枝茯苓丸加大黃甘草を附けたれば翁之を診して當歸建中湯加乾姜を與へられたり。

問て曰く此女は腰痛のみにて腹痛はなく只天癸將に通せんとして然る者と見たる故桂苓丸にて經を誘えばよしと按じたるなり誤診か又は方の當らざるか又當歸建中湯加干姜の目的を示し玉はん事を伏願す。

翁曰く此女は血分の痲なり腰痛と腹痛とは表裏の血結を異にするのみにて治法は同じ事なり故に古人痲の腰痛に當歸建中や附中建中を用てあり。未だ天癸の至らぬ女に破血を用るは古人所謂破瓜を俟たずして之を破ると同じく太早計なり深く戒む可し。

一男年二十四始めは便毒を患えしが差て後風日に遇ふときは面部手足に發疹し荏苒差えざる者半年餘終に臀腿の部に多く楊梅瘡を發し其他各部にも點々痲を結べり。凡て痒甚しと云ふ余診して解毒劑加荆防連翹を附し兼用を七寶丸とす翁之に深齋遺糧湯を與へられたり兼用は按の如し。

問て曰く解毒劑荆防連翹と深齋遺糧湯は同じく皮膚に關する事を知れ共未だ其別を悟らず伏て乞ふ其目的を教へ玉はん事を。

翁曰く解毒劑加味は敗毒利水を主とす遺糧湯は毒の表位に在る者を主として揮發の効あり此患者は利水をするは無益の兵を使ふなり。

一婦年四十九眼滿を患ひ一年許にして増大鼓の如し。發病前俊然として尿閉の症を得導尿管を用て通する事を得しと云ふ。經水は少量なれ共其他少しも異症を兼ねず。余之に桂苓丸龍甲甘草兼用硝石大圓を附したれば翁之を診して加味を茅根車前子に代られたり兼用は按の如し。

問て曰く桂苓丸將軍甘草又加龍甲甘草加茅根車前子加附子將軍の類路其之く處を悟るに似たれ共未だ確辨を得ず又此病者の眼滿も血分に因るは論なけれ共今滿せしむる者は氣にして尿閉は畢竟發病の際の客症なり。當今は其症もなくして水分に關するとは少しも心付かさざりし願くば其徴と及び次手に所謂血瀝痛なる者の徴候を大略高示を垂れ玉はん事を。

翁曰く此婦人尿道分泌の機を失するより眼滿をなすなり。今不利の症にしと雖共其根源に本て消導するなり是等の手段は老練して悟る可し。

血瀝痛とは瘀血腰間に瀝て疼痛するを云ふ。其痛四肢に攻注する者は瘀血流注なり。治法は異なる事なし輕き者は通經導滯重き者は桃核承氣加附子なり桂苓加附將は其中間に行く者と知るべし。

一男年二十九眼視朦朧して面して頭重く枕臥するときは頭皮麻痺し常に肩背強急時に動悸上衝足冷ゆる等の症あり初夏より冬に至つて差えず。來つて治を乞ふ余先づ之を診して明朗飲に明目地黄丸を兼用し問て曰く此眼目朦朧は客症にてありしや又先急後緩の高意ありて然るや今按すれば定めて主客を取違えたるならんと追考す高辨を乞ふ。

翁曰く此男子肝氣充盛肩背宗筋を拘束し頭部の血之が爲めに運轉する事は因て眼目精花を失するなり。其本を治せざるは枝葉榮する事は猶盜賊を庫中に封じて其外を嚴備すると同じ。

一婦年五十六月頃より前陰瘡を生じ痒き事忍び難く漸くに蔓延して糜爛汗出で又咽喉微に腫痛し頭部にも瘡を發し臍中も亦糜爛せり而して眼視も亦かすみ明ならず十一月に至て翁の治を乞ふ。余之に龍胆瀉瀉加遺糧兼用紫金丹を

附けたれば翁之を診して解毒劑荆防連翹に兼用七寶丸を與えられたり。

問て曰く解毒劑加味に正されたる旨意は其瘡下部に多しと雖共元來其毒周身に散莖の勢ありて専ら表に動く者なる故咽喉の微患には構はず又龍胆瀉肝も用ひられざりしと悟るなり。果して其高意あるや又語解なりや如何を乞ひ問ふ。

翁曰く病に主客の別あり此婦は下部の梅毒が主證にて其餘毒が薰蒸して頭部に及び眼視を妨たげ咽喉を腫塞す此

三證は客なり。故に其主證を治すれば他は自然に消滅するなり。

一男年五十一日誤て左足を溝泥中に踏み入れたれ共別に打撲せしとも覺えざりしに其夜より尿血多く莖道痛み五日にして血は止みたれ共以後尿する毎に莖中必ず微痛止まず尿射細へして線の如く快注せず。此頃より左の臀腿微擧拘重して痛みありと云ふ。初めより今に至る迄既に五十日に及びり。飲食二便神心等常に異なる事なし。余之を

診して四味腸瀉湯を附し高安氏は濕疫論の桃仁湯を附せしに翁は桂枝茯苓丸將軍甘草方を與えられたり。

問て曰く四味腸瀉湯や桃仁湯を附けたるは何れも瘀血が目的なれ共畢竟誤索に屬して見の立たざる故に中らざる者が桂苓丸將軍甘草を此場に行くの旨を乞ひ問ふ。

翁曰く此患者打撲に因て瘀血を生ず瘀血を逐除せざれば追々臟腿擧痛して諸症蜂起す可し。徒に尿道に着眼するは拘泥なり。又腸瀉湯は大黃牡丹湯の輕症にして動もすれば膿を醸さんとする者に効あり。其故に早く逐血利水して膿氣を殺ぐの策なり。此證は専ら破瘀を主とす。若日數を経て癒ざる者は附子を加えて溫經せざれば効なし。

一女年二十二八九歳の時より小便心を催すと暫時も忍ぶ能はず。忍べば則ち自ら漏れんと欲するの患あり。年長に隨て其證益甚し。診之に腹拘攣するのみ其他少しも患ふる處なし。余之に八味丸料を付けたれば翁は桂枝加龍骨牡蠣湯に兼用に牛車腎氣の煉藥を與えられたり。

問て曰く桂枝加龍骨は方函口訣に運用して遺尿失禁を治する事を説かれたるを忘れて居たり。但し其目的は即ち小腹弦急にある可し。され共龍骨牡蠣の遺精遺尿に効ある所以は古方藥議にて略其理を辨ぜざるにあらね共未だ明了する事能はず。東洞翁の動悸を目的とばかりも今少し會得し雖く又收斂とも決する能はず伏て大略其要を示し玉はん事を願ふ翁曰く桂枝加龍骨は本腹裏拘急して腎間の運轉を緊縮し精道弛緩になりたるを溫和收斂する手段なれ共此場にては先尿道の弛緩を收斂して腎氣にて膀胱の機關を助るの策なり。

一男三十一左脛に瘡を發し糜爛汁出て廣さ手掌の如く漸くに枯るゝと雖共尙ほ微腫凝結焮熱ありて痛み去らず上下の筋に引きて久歩する不能又正坐し難し色紫黒にして尙殘痂あり七月より發して十一月に至つて消せず兼て時々心下微痛す。余之に當歸粘痛湯を附し中村氏は忍冬解毒湯に化毒丸を兼用にしたれば翁之を診して解毒劑荆防連翹を與へられたり。

問て曰く此瘡を已に毒性を誤診したるは固より論なし。され共此の瘡形にても當歸粘痛湯の行くべき者ありやなきや。從來當歸粘痛湯は用ひ慣れぬ方故其活用する處を知らず依て乞ふ其秘を傳へ玉はん事を。翁曰く當歸粘痛湯は濕熱を主として肉分の疼痛に効あり骨節に在る者には應ぜず。

一男年二十七齒齦より膿を出す痛みなし。春より冬に至て癒えず此人一昨年膿淋を患ひ又昨年十二月より再患し未だ差えざるの前より此症を發すと云ふ。其他少しも苦しむ處なし。余桔梗解毒湯に兼用結毒紫金丹を附けたれば翁之を診して桂枝桔梗湯加大黃に乳香散を與えられたり兼用は按の如し。

問て曰く桔梗解毒湯は咽喉結毒の主方にして其他口舌凡て上部の結毒に用て宜しきは已に教を得たり。桂枝桔梗湯の如きは梅氣ある者にも用ゆるが又此病者は梅氣の症にあらざるか願くば高辨を得ん事を。翁曰く此男子、眼腫にて一概に梅毒となすべからず。且つ血燥の候あり因て此方を主とす眼腫に黃蘗を用ゆるときは反て膿を醸す者なり。清熱滋血を主とす。司し去ながら結毒の候なきにあらず因て紫金丹を兼用するなり。

一男子憎邪に感じ以後上衝頭重く耳鳴動悸短氣氣字鬱塞し午後に至れば微に惡寒發熱す。病を得て已に十四五日なり。余之二診して柴胡姜桂湯加吳茱を附けたれば翁は柴蘇飲を與えられたり。

問て曰く此は上衝耳鳴等の勢餘邪の頭部に鬱する者にして兼ぬるに氣鬱症あるを以て柴蘇飲に宜しく柴胡姜桂湯とは邪勢に少しく速ひある者か。

翁曰く餘邪鬱滯の耳鳴聾は柴蘇飲効あり。桂姜牡蠣などは工合あしき者なり。

一男年二十三咽中腫るゝが如く塞るが如く食するに妨げなければ共唾を呑むに不利し又微痛す心下痞して食物停滯す。

如此者三十日許此人梅毒の患ひなし。余半夏厚朴湯合桔梗湯を附けたれば翁之に寛中湯加吳茱萸に翁丸を兼服せしめらる。

問て曰く梅核氣の症に半夏厚朴合桔梗と半夏厚朴加浮石と寛中湯と略其別を辨するに似て未だ確悟する能はず。故に屢々齟齬する事多し願くば略其別を示し玉はん事を。

翁曰く半夏厚朴合桔梗は咽痛氣塞を主とし加浮石は核氣頑固にして解しがたき者を治す。凡て浮石は解凝の効あり。浮石丸を血塊に用ひ浮石一味を驚風搐搦に用ゆるも同意なり。寛中加吳は降氣を主とするなり。

一男子飲食停滯心下痞脇下攣急して痛み腹鳴噎氣吞酸吐水等の症あり。病發して三十日許洋家の治を得皮下射注など施して少しも効なし。大便は秘結し易し余之に七味良積湯に起癩丸を兼用にしたれば翁は四逆散吳茱萸良姜に改ためられたり。兼用は按の如し。問て曰く此は定案の拜見しては却て何の故に良積湯を付けたりしや自ら其意を追解する能はず元來良積湯は方函口訣に飲滯の痛ある者に用ゆと説き玉えり、其方は苓桂甘藶湯に加味したる者なれば目的は同じく膈下の動にある可けれ共今先生の用ひ玉けを見るに強て右の目的に拘はらざるに似たり依て未だ其秘を會得する能はず伏て良積湯の之き場と其方意とを教え玉はん事を乞ふ。

翁曰く伏飲上逆して痛を爲す者は良積湯なり。任脉拘急飲を挾て痛む者は四逆散吳茱萸良姜なり古人は飲痛右にあるを良積湯とし左に在るを四逆散吳蠶とすれ共一概に拘泥す可らず。此病者は脇下攣急を目的にして四逆散加味を處したるなり。

一婦年三十一初め右肩手麻痺續て疼痛又轉じて右膝痛痺荏苒差えざる者一年餘且つ事を執るときは肩背拘急して堪え難しと云ふ月經常の如く其他も亦苦しむ處なし。余之に四物湯加木瓜煎薏苡仁を附けたれば翁更に診して明醫指掌薏苡仁湯を與え牛黃丸を兼用せしめらる。

問て曰く四物湯木瓜煎薏苡仁の之き場及び其症を乞ひ問ふ。翁曰く此方は産後血虚筋脉榮せず麻痺急する者を治す。又脚氣血弱手足頑麻步履する能はざる者に用ゆ。此病若は歷節風の變症にして更に血虚の候なし故に薏苡仁湯を用ゆ。若し歷節にても數年苦痛骨立血虚して痛止まざる者ば四物湯紅花香附子獨活厚朴甘草を酒煎にして用て大防風湯などより捷効あり。四物は板重の劑なれ共加味に因て格別のはたらきあり知らずんばある可らず。

一男子微邪に感じて後聲嘎癒えず其他異候なし只時々微咳腹急を覺ゆるのみ如此者一年許余之を診して麥門冬湯加桔梗紫菀に響聲破笛丸を附したれば翁は千金肺傷湯を與えらる兼用ば按の如し。

問て曰く聲嘎の症は大人の咽喉結每及び小兒馬脾風或は嚔喉風の末期には多く經歷し又咳嗽甚きが爲めに一時聲嘎するの輕症は屢知る處なり。元來郷里にては當地の如く肺痿症の如きを見ず。依て聲嘎の肺痿に因て來る者を經驗せず。故に其治法の如きも至て拙なり願くば麥門冬湯桔梗支參山豆根と桔梗紫菀の之き處と又此病者に肺傷湯を處せられたる由を授け玉はん事を。

翁曰く聲嘎の一症肺痿に屬する者あり。結毒に屬する者風痰壅盛に因る者あり。肺熱には人參養榮湯肺虚には肺傷湯麥門冬湯桔梗紫菀の類なり。然れ共此症難治に屬す。故に古人名曰陰火喉癰結毒の者喉癰湯虚す者麥門冬湯

桔梗支參山豆根なり毒甚き者は流涎膏或は牛黃末を用ゆ。風痰壅盛の者は小青龍加桔梗菴丸の類、馬脾嚔喉の聲嘎は苦酒湯人參胡桃湯加訶子杏仁を用ゆるなり。

一男年六十左半身稍不遂言語も少しく蹇澁す近頃は右半身も微に不遂の意ありと云ふ。發病來已に一年半餘輕症と雖共頑固なり脇下攀急を目的にして四逆散合強神湯を附し兼用は滾痰丸を附す。翁之を診して桂枝加蒼朮附合強神湯を與えらる兼用は按の如し。

問て曰く不遂の症に四逆散合強神の者と桂枝加蒼朮附合強神と略其旨を悟るに似たれども未だ確ならず故に屢誤て互に相齟齬する者如此其別を示し玉はん事を乞ふ。

翁曰く四逆散合強神は氣中を主とす。其一等甚き者は柴龍蠅去鉛四味の加味なり。虚する者桑言治肝虚内熱方なり。桂朮蒼朮附合強神は眞中風にて小續命湯の一等深き處なり。世間にて烏藥順氣は味順氣など用る處に捷効あり。一婦年三十八心脇下より背に徹して屢急痛し春より冬に至て止まず終に鮮血を下し而して急痛尙ほ止まず下血減すと雖共尙ほ未收頭痛目眩肩背強ばり動悸短氣等の症を加ふ。如此者二十日餘月經不來者二月來て治を乞ふ。余之に茵荊湯を附す翁更に診して溫清飲湯を與えられたり。

問て曰く此病者は下血久しく止まずして黃胖狀をなし舌唇も刮白なる故蒼朮連尾栝には心付かずして鐵劑に目を付けたたり。され共多日胸痛ありて今尙止まざる者畢竟熱痛にして溫清飲を處し玉ひしにや教を乞ふ。且茵荊湯も從來親しみなき方故口訣に説かれたる症。目的に思ふのみにて未だ屹度其行き場を會得せず願くば再び高秘を傳え玉は

ん事を。

翁曰く茵瀉湯は三角家の方にて下血久しく止まず遂に水氣を發し或は下血差て後身體黃腫動悸甚しく小便不利し脱候なき者に用ゆるなり。脱候あれば六君子加味なり此病者は血氣妄行中院拘急して痛を帯び熱候あり因て溫清飲を與ふるなり。

一男年二十五咳嗽甚しくして之が爲めに食物を吐し時々發熱毎夜盜汗又短氣自ら小腹掣急を覺えて安からず春より發して夏に増し冬に至て甚だし。余之を診して藥苓建中湯に兼用六味生津丹を附けたりしに翁更に診して麥門冬湯五味桑白胡黃連を與えられたり兼用は元按なり。

翁曰く藥令建中は中氣不足腹裏拘急して寒熱ある者を治す。此患者は咳逆甚しく肺氣急迫する故食物を吐し少腹も之が爲めに上迫するなり。其主は肺氣を利し咳逆を寛するに在り。胡黃連を加る者は肺熱を利すると嘔吐を下降するの手段なり惡阻止まざる者に胡黃連一味を用るの意を玩味すべし。

一男年二十一心下痞滿脇下掣急嘈雜して時に急痛し腹中雷鳴氣宇鬱塞す。九十日を歴て癒えず初め卒然嘔吐する者一面續て此症をなすと云ふ。余之に半夏瀉心湯吳茱萸起癢丸を附けたれば翁は四逆散吳茱萸に改ためられたり。

問て曰く此人は本と卒然嘔吐せしより起りし症にして其胃跡中不和宿飲停滯して去らざるか致す處にして胃の事が主となると思ひし故脇下拘攣氣宇鬱塞等の症はあれ共四逆散をば附けざりしなり。此等の輕症になると反て本末の見立に窮する事多し。高示を得せしめ玉はん事を乞ふ。

翁曰く脇下拘攣して任脈急迫する故水飲停蓄して卒然嘔吐を發するなり況んや嘔吐後なれば其因に泥まず脇下拘攣あれば四逆散を的とし心下痞鞭斗なれば半夏瀉心湯を主とするなり。

一婦年殆んど五十壯年より宿疾あり其症頭痛目眩眼胞糜爛して明視不爽肩背強急殊に甚しく時々上衝動氣短氣腹微氣字鬱塞す經水は常の如く味舌飲食二便も異なる處なし。余之を診して本事方釣藤散に兼用龍騰飲加紅花を附けたれば翁之を診して葛根加芍黃湯を與えられたり。

問て曰く此病者は専ら肝氣上逆の爲す處にして其火頭部に鬱し之が爲に眼胞糜爛等をも起したる者と見たり。夫れ故肝氣を疏する劑の内にて石膏の入りたる上部に關するの方よからんと愚思して釣藤散をば附けたるなり。腦中毒ある者とは思はざりし伏て教を乞ふ。

翁曰く毒眼なり。如此眼疾に葛根加芍黃を用ひらるゝ事上篇及び此篇上條にも出でたり見合すべし。一男年三十餘膿淋を患ひ癒えざる者一年許終に便毒を發し洋醫の治を受けて消散せしめ更に諸肢節疼痛の症を發み殊に頭痛甚しく日に増劇して刺すが如く眠る能なざるに至る事あり。如此者二ヶ月許淋症も亦依然たり余之に頭風神方に兼用七寶丸を附けたれば翁之を診して大百中飲に兼用は化毒丸を與えられたり。

問て曰く此方は方函口訣に結毒の頭痛他症胸痛にも用ゆる事を説かれたる故試に付けて見たり。元來此方は從來方名をだも聞きたる事なき方故効驗も未だ經ざれば用ひ場も未だ得心せず。此病者何分頭痛甚しき故早く之を緩めて後に他症に應ぜざれば後來の害多からんと愚按して此方をば附けたるなり。從來は主治の諸風上改と云ふに拘ら

ず凡て毒ありて頭痛する者には大抵局方の川芎茶調散に加減して用ひ劇しき者には加石膏にするもあり。此病者大百中飲とは思ひ掛なかりし大百中飲は口訣にも上部に効ある事を説かれたれ共畢竟極めて痼毒にして攻補し難く動かし難く收め難き所に用ゆる者と思ひたれば更に此方には心付かざりし。伏て乞ふ頭風神方の之き場と大百中飲に正されたる故とを示し玉はん事を。

翁曰く頭風神方は廣筆記に出づ結毒の虚候に用ゆ可し。若表實の證あらば葛根芩黃なり裏實の者は大百中飲なり七寶丸は下部を主とす。若上部の結毒に用ゆるときは忽耳聾失明の害を生ず慎ますんばあるべからず。

一男年三十許初め下疳を患ひ未だ差えずして便毎を發せしに潰々すして消敗し繼て右額痛みしが終に劇頭痛となり又發して左額下凝腫して膿をなし口裏に潰えて齧奥に孔を穿ち膿出で、止まず頬車凝結して口開き難く又右眼胞焮腫膨塞して開く能はず手を以て之を撥け見れば瞳子雲暗にして殆んど失明す。而陰莖尙腫爛止まず陰毛際灸痕ありて壞蝕甚しく又耳も稍聾し渴して湯水を飲む事甚だしく小便至て多し、初め下疳を得てより此に至る迄殆んど一年飲食進まず肌肉羸瘦皮膚無澤脈微寒熱す大便は二日一行にして硬き方なりと云ふ。余先づ之を診して逍遙解毒湯に兼用結毒紫金丹を附したりしに翁更に之を診して大百中飲を與へられたり兼用は按の如し。

問て曰く此は肌肉羸瘦脈微寒熱皮膚無澤等の虚候あるを以て游血を兼ねたる解毒劑にあらざれば佳ならずと思ひし故此方を附けたり。元來の毒の模様は大百中飲の者とは見たり。又此等の瘰癧に五寶丹を服せしめて効あらんと覺ゆ如何伏乞高教而已。

翁曰く此患者虚候あれ共酷毒の爲めに精氣を滋養するときは毒益蔓延す。因て此方を與ふるなり又五寶丹は虚火ある者決して用ゆ可からず。金石の劑にても此方は最も辛熱に屬す。古人服石發暴熱死する者多し一鑑せざるべからず。

一男年三十二右小腹臍に近きの處拘結塊をなし之を按すれば痛み心下に連なり而して時に寒熱し盜汗あり病を得て六七十日肌肉稍羸瘦し飲食進まず脈數にして力少なし。大便秘硬小便赤濁なり余之に外臺柴胡龍甲湯を附す。高安氏樂令建中湯を附す翁更に診して樂令建中湯佳なりとて之を與へられたり。

問て曰く此は寒熱盜汗肌肉羸瘦の候を參伍するときは樂令建中に論なしと思ひたれ共其拘結は常の裏急とは稍異にして塊の如く一部に凝りて上下學急は強くして挺の如く且つ上に着て痛みあり。又本と拘結を生じて後に此の諸虚證を生ぜし者故先づ其結を解し害物消ぜし後にあらすんば樂令建中も効を立つる能はじと見込て此方を附けたるなり見込違ひにや伏て高辨を乞ふ。

翁曰く此の結拘は眞の 癖にあらす中氣 して裏急するなり其辨別は活物上に於て熟練せざれば心得す可からず、但 癖爲勞と裏急爲勞との二道を胸中に常識して病者を精診すべし。

一男年六十餘右頰下下牙床に附て核腫し漸々増大拳の如し。之を按ぜば微痛す。焮熱の候なく其他も亦異狀なし。病を得て二十餘日なり余小柴胡加桔梗石膏を附す、翁之に醫通の茵陳散を與えられたり

問て曰く醫通茵陳散の功を問ふ。

翁曰く此病者は尋常時毒頭頤の類にあらず、其毒骨膜に附て腫起する者なり。

茵陳散は骨槽風の深症を治す因て之を與ふるなり。大小柴胡桔石は時毒頭瘰には効あれ共此症には馬耳風なり。

一男年三十八項部拘痛して轉動し難く兼て頭痛す。如此者一年許其症益甚し。此人嘗て梅毒を患ひ差て後ち毎年秋に至れば必ず膝痛を患ふる事一月許昨年膝痛止で後項痛に轉じ當年は未だ膝痛なしと云ふ此れ其毒項に轉するなり余葛根加朮附に兼用化毒丸を附したれば翁診して加味を芎黃に改められたり化毒丸は本の如し。

問て曰く此は項痛の甚しき處附子にあらざれば動かす可らずと思ひたり何の故に芎黃に宜しきや明教を乞ふ翁曰く此人脈浮數熱候あり附子の宜しき處にあらず。又朮附と伍するは關節に痲着するを的とするなり。

一男年三十七夏の頃風邪に感じ差て後各節轉移して痛みしが四五月にして殆んど癒たれ共更に小水頻數にして微濁腰間不利し大便秘_レ翁之に葛根芎黃を與へられたり。

翁曰く外感後身體疼痛一旦は去れ共尙ほ肩背に拘急する處ありて上迫し陽氣下流する事能はざる故水道約を失して小便頻數になり腰間も不利するなり之に葛根芎黃を與ふるは其本を治して其標自ら治するの理なり。

一男年二十六六年前より宿疾あり其症臨腹擊急し臍傍及び小腹に當て物あり瘰瘰の如く時に出沒横斜或は浮脹す而して常に氣鬱し易し大便秘澁す余之に烏苓通氣散を附けたれば翁診して更に四逆散吳茱萸茴香を與え兼て牛黃丸を服せしめらる。

問て曰く此は從來烏苓通氣散をば廣く痲症に用ひ殊に小腹に瘰瘰の如き者出沒浮脹横斜するを目的とせし故此方

を附けたり。香附子烏藥などを組んで氣鬱に關する痲症に通用す。又此の出沒する者は痲の小腸に在つて風氣を蓄ふる者とは如何哉伏て乞ふ更に先生の目的とせらるゝ處を教え玉はん事を。

翁曰く痲とさへ云へば烏苓通氣を用ゆるは庸醫の常套にて笑に堪たり。痲は大體腸中緊縮瘀濁下る能はずして害をなす甚きは瘀血に屬するあり。又寒飲腸中に停蓄して害するもあり。烏苓は一通り氣痛には効あれ共痲の重症には効なし乳の氣症に用て効あるにて知る可し、痲の治療は金匱を熟讀して合點す可し。

一女兒六歳なり毎年寒冷の候に入れば必ず咳嗽の患を發す。夜間殊に甚く微熱盜汗等あり余之に四逆散龍甲茯苓を附たれば翁診して麥門冬湯五味桑白に兼用百華丸を與へられたり。

問て曰く此兒は腹の拘攣強き故此れに妨げられて體氣盛ならず依て寒氣に襲はれ易くして毎年咳嗽を發する者と見たるなり眞の肺患とは思ひ掛けなかりし伏て明教を乞ふ。

翁曰く此病者は肺寒の候あり故四逆散とは零壞の遠ひあり。若一等重き者を千金補肺湯とす。宜しく補肺湯の主

治を熟讀すべし。

一婦年三十有餘其症動悸短氣行步動作し難く膚色無澤時に四肢浮し腹微滿す。此瘕を得て殆んど一年許此婦近年經水過多且つ毎月日を延く事二十許にして漸くに收まるを得ると云ふ余之に六君子加三味兼用鐵砂丸を附したれば翁更に診して聯珠飲を與へられたり。

兼用は本の如し

翁曰く動悸浮腫血分より来る者は聯珠飲の主なり他の脾勞瘵賁と混す可からず。

補中益氣湯に加芍藥茯苓即調中湯の意

翁曰く補中益氣湯は理中に本づきて組たる方なり。其方意は醫方紀原に詳に見ゆ。若し中氣不足して裏急の症ある者は此二味を加るを佳とす。即後世の調中益氣湯の意なれ共吾門にては建理に清熱を兼たる意にて運用するなり。

蘇子桑白皮貝紫菀の別

翁曰蘇子は滋潤して利氣を主とす故に虚喘の主薬とす。桑白皮は肺中の熱を疏し利水する者なり。貝母は半夏の反對にて肺中の津液を生じ潤利する者なり紫菀は肺氣を緩くし聲音を舒長する者なり。

牛皮消川骨の功

翁曰牛皮消は白芨の一等力強き者にして血分を收瀦して脈絡を通和す。故に金瘡亡血及腦中帶下に用ひ調榮湯及八珍湯加牛皮消の所之是なり。萍蓬は和血利水を主とす。故に打撲疼痛血氣刺痛等に専用するなり。

芥甘姜味辛夏仁黃湯に葶藶を加る者の症

翁曰支飲にて水氣肺を射て咳嗽甚く氣急息迫し或は水四肢に流れて小便不利する者此方を佳とす。葶藶上迫を寛するは瀉肺湯の意なり。利を主とするは牡澤散の意なり。柴胡枳桔湯に葶藶を加るも同手段なり。

六君子加味之辨

翁曰六君子に平胃散を合し香附子大を加る者は梅花無盡藏に出て脾勞の主力なり。吾門にては諸亡血後の短氣水腫に活用す。所謂益血不如益氣の意なり。六君子に黃連を加るは古人氣虚の心悸に用ゆ。此意に本きて脾勞黃胖の心煩心悸ある者は木香を去り黃連を加るなり。

荆桃承氣湯之説

翁曰荆桃承氣は奥劣瘵産後の瘵病及併産の血迷を治する經驗方なり。余は此意に本づきて亡血後の破併風に用ひ又血分に屬する發狂に運用す。瘵に荆芥を用ゆるは佗華の愈風散なり。發狂に運用するは大承氣に當歸を加ると同意なり。

活血解毒湯に反鼻を加る意

翁曰此方に反鼻を加る者は活血の力を逞ふせんとなり若大楓子丸を兼用する者には加るに及ばず。

解毒劑加桂附牽牛之訣

翁曰解毒劑に桂附牽牛を加る者は美濃大垣醫家痛風を治するの奇方なり。余は此意に本づき痛風遺毒癩毒ある者に用ゆ。又梅毒の骨痛にも用ゆ。牽牛は骨節間の水氣を祛く者なり。此方は桂朮苓附に比すれば實者に非ざれば効なし。

桂枝桔梗湯加葛根石膏の訣

翁曰此二味を加る者は崑津木崑臺の經驗にして牙齒疼痛腐爛及び上部瘵毒上衝項背強急する者を治す。輒くは其

著湯液緯編を讀て體認すべし。

口中病に桂枝桔梗湯と竹葉涼膈を行る者の別。

翁曰く桂枝湯は血分に熱を醸し口舌糜爛疼痛する者を主とす。若し虚熱口舌糜爛如無皮狀者は準繩清熱補氣湯の主なり。加減涼膈は上焦閉塞膈熱より來る者に用ゆ竹葉蜜を加れば一層口熱を和するなり。其一等聲しき者を調胃承氣湯紫雪の之く處とす。

小柴胡去半夏加拍蕪湯に荆防連翹新加の事。

翁曰く去加柴胡湯は諸瘡の套法とす。九味柴胡湯に比すれば表位に盛なる者なり。凡て瘡瘍は肝胆の鬱熱として柴胡を用るが古人の成法なり。去加湯の經驗は原南陽の醫事小言を始として村瀨の幼科書に詳にしたり。

柴胡疎肝湯加味の訣

翁曰柴胡疎肝湯は四逆散の症にして肝氣上逆甚き者に用ゆ醫通の疎肝散は又肝火亢盛胸痛咯血等を發する者を主とす麥門を加るは梔麥と伍して膈熱を潤利するなり。石膏を加るは肝火亢盛を鎮墜するなり。

柴陷加竹筴

翁曰く此方は邪熱胸膈に存て諸害を爲を主とす。竹筴を加るときは清熱潤燥の力を益す此加味は元啞科の頓嗽胸滿を治する方なれ共今諸病に活用するなり。

歸脾加吳及加芍の別

翁曰く歸脾加吳は古人神疲勞を治する策なり。歸脾加芍は幽僻病を治する方なり。婦人血虚閉諸症効なきにも用ゆる事あり。

一男年三十一大酒客にして毎飲七八合に至らざれば醉氣を得ず。多飲すれば三升に至ると云ふ。夏の頃より面部浮腫短氣仰臥すれば胸中苦悶の狀あり。朝起殊に頭面重きを覺ゆ又足跗屢麻痺し行歩に緩弱不便なる事多し。冬に至て來り治を乞ふ。余先づ之を診するに脚氣に以たり又眼腫風の漸に似たり。方を按ずる能はず翁診して蒼甘姜味辛及仁黃湯加參瀝を與えられたり。

翁曰く此人年來酒毒にて淡飲を醸し胸中安からず。短氣し而面部上則浮腫をなし下部の陽氣之が爲めにくる事能はず。故に此方を處す。若干此症一等寛なる者は飲病論の半夏湯に宜し。

一男年十七初め咯血する事一合五勺計以後咳する毎に痰血あり、短氣胸滿等の症あり脈は數にして緊ならず。余麥門冬湯地膠連を處し兼用を桃承丸にしたれば翁史に之を診して聖濟人參養榮湯に兼用白朮散を與えられたり。

問曰く此病人を謙造誤方せしに此頃又中村氏の人參養榮湯を付けたるを麥門地膠連に正し玉ひしを見たりされば謙造の才愚のみならず此二方の間に紛れ易き處ありて互に相齟齬すと見ゆ。願くば其別を教え玉はん事を乞ふ。

翁曰く此患者は既に肺痿の候具はりて脈も虛數なり。大便秘すと雖共妄りに桃承等を與ふれば速に虚々の禍を招く。故に此方を投じ白朮にて肺血を收瀉するなり。麥門地膠連は咯血咳血の初起に用ゆ。膈熱甚き者黃解散を兼用す又咳血なく共炙甘草湯の症にて膈熱を帶る者に用て効あり。

只前轍を踏むは淺見と云べし。

一男兒九歳眼邊より顴鼻の間に蒼を發し汁出で痂をなし眼胞も亦少しく糜爛せり。又左耳膿汁出で其流るゝ處隨て瘡痂てを結ぶ。或は赤え或は發す如此者四年許余之に葛根芎黃に兼用馬明丸を付けたれば翁更に診して六味馬明湯加忍冬連翹を與えられたり。

問曰く此は先きに此の如き病兒ありて馬明湯加味を付けたれば葛根湯加芎黃兼用馬明丸に正し玉ひし事あり、故に今其轍を踏たるなり。但し先きの兒は面瘡少なき因て思ふ顔邊或は皮膚が主となる者と腦が主となる者との違ひかと伏て高論を乞ふ。

翁曰く此症は已に四星霜を経て胎毒の固着する者なり。馬明膏に非ざれば其毒を祛く事能はず。若誤て發汗劑を投すれば瘡氣滋蔓して耳邊眼中に及ぶ事あり。若趾症初起の者なれば一旦發表して而後下劑を與ふれば反て速に治す新舊の別知すんはある可らず。

藤田謙造著 得益錄 奥付

昭和十八年四月十日印刷
昭和十八年四月十五日發行

版權
所有

著者 故藤田謙造

發行者 馬場和光

印刷所 時事印刷社

東京市品川区西大崎二ノ一四六
電話大崎 三三三一

發行所 日本醫學研究會

東京市世田谷區成城町九六
振替東京一〇六六四四番
電話碓 二三八番

定價 壹圓八拾錢 送料 六錢

434
108

終

